

南方熊楠

西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語

（異れる民族間に存する類似古話の比較研究）

藪野直史 注

「やぶちゃん注」本論考は明治四四（一九一）年三月発行の『東京人類學會雜誌』第二十六卷三百号）初出で（初出は「J-STAGE」のこちら（PDF）で読める）、大正一五（一九二六）年五月に岡書院から刊行された単行本「南方隨筆」に収録された。

底本は同書初版本を[国立国会図書館デジタルコレクション](#)の「南方隨筆」[原本画像](#)で視認して用いた。

但し、加工データとして、前の「[小兒と魔除](#)」注釈中、[サイト「私設万葉文庫」](#)（この堅実な電子化サイトは古くから知っていたが（どういう方が作っておられるかも知っている）、「万葉集」は永く私の興味圏外にあったため、ここ十数年以上、訪問していなかった）に平凡社の「南方熊楠全集」の本文電子化（全部ではないが、主要邦文論文部はカヴァーされている）があることを発見したため、今回からは、[そちらにある電子テキスト（底本は平凡社「南方熊楠全集」第二卷（南方閑話・南方隨筆・続南方隨筆）一九七一年刊）](#)を加工データとして使用させて戴くこととした。ここに御礼申し上げる。疑問箇所は先の[初出](#)及び所持する平凡社「南方熊楠選集3」（一九八四年刊）の「南方隨筆」（新字新仮名）で校合した。

但し、既に「[小兒と魔除](#)」の注で遂に爆発憤激して述べたが、少なくとも、この全集を親本とした私の所持する「選集」は、熊楠の肉声を不当に（厳密な細かな書き換え基準を設けずに）、ただただ読み易けりゃいいに恣意的に標準化しており、甚だ問題があることが判った。これは「選集」が「全集」の校訂方針に拠っていると述べている以上、「全集」もそうした変更が行われているものと思われる。そう言った舌が干ぬ間に、冒頭本文注で、またしても、私の癪癢が暴発した。五月蠅いと思うが、我慢してお附き合い戴きたい。

段落に附した注の後は一行空け、前注の場合も前後を一行空けた。

なお、欧文書誌データの表記の不審部分（実は不全・不審・誤記部分が甚だ多い）は上記「選集」に拠って修正した。但し、それは五月蠅いだけになるので、原則、注記していない。本作は、ブログで分割公開したものを、一括化し、概ね、ルビ化してPDFに変換したものである。但し、ブログ版で老婆心で附した読みは、一部を省略してある。

なお、一箇所、ブログで御指摘を頂戴して訂正した箇所は、特に旧注の誤りを示さずに、結果のみを示した。【二〇二一年二月十五日 藪野直史】

西曆九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語

(異れる民族間に存する類似古話の比較研究)

明治四十一年六月の早稻田文學、予の「大日本時代史に載せたる古話三則」中に述し如く、古話に其土特有の者と、他邦より傳來のもの者と有り、又古く各民族未だ分立せざりし時代すでに世に存せしと覺しく、廣く諸方に弘通され居たる者有、一々之を識別するは、十分材料を集め、整理研究せる後ならで叶はぬ事也、而して、故「イサアク、テロロル」の原始「アリアン」人篇に「レッツ」「リチュアニアンス」等の諸語は、由來頗る古き者乍ら、記録無く、文章無かりし爲、希臘羅丁「やぶちゃん注」：「ラテン」。程に古く思はぬ人多しと論ぜると等しく、古話に於ても、記録せる時代の先後は、必しも其話が出來せし「やぶちゃん注」：「しゆつたいせし」。早晚と偕はず「やぶちゃん注」：「ともなはず」。併し「やぶちゃん注」：「しかし」。齊しく文筆の用を知りおりたる諸國民に就て、同種古話の記録の先後と、類似せる諸點の多寡を察すれば、大要其譚の、先つて何れの國に専ら行はれ出たるを知るに難からじ、外國の古話を吾國に輸入せしと思はるゝ一二の例を擧んに、左大史小槻季繼記に、「太政大臣實基公(嘉祿元年十一月十日補せらる)檢非違使別當の時、八歳の男子を、二人の女、面々に我子の由を稱しける間だ、法曹輩計申云、任法意旨、三人が血を出して、流水に流す時、眞實の骨肉の血、末にて一つに成り、他人の血氣は末にて別也、如此可沙汰之由、計申處、大理云、八歲者可血之條、尤不便事也、今度沙汰の時、彼三人並諸官等、可參之由、被仰て、其日遂不被決雌雄、後沙汰日、彼三人諸官等令參之時、數刻之後、大理出座、被仰云、件女性兩人して、此男子を引て、引取らむを母と可申由被計ける時、二人して此子を引けるに、引れて損ぜんとする時に、一人の女は放ち、今一人は只引勝んとす、如此する事度々、其時大理云、放つる女は實母也、勞はるに由て此如放つ者也、今一人は無勞心、只勝んと思ふ心計にて引也云々、無相違、放つる女は母也、當座被引は、荒ふには似たれども、思慮の深き處也、實基公は法曹に達する人也」と見ゆ、古事類苑法律部第一冊、一一七三頁に、此記を引き、次に風俗通を引て云、前漢、潁川太守、黃霸、本郡有富室兄弟同居、弟婦懷妊、其長姁亦懷妊胎傷匿之、弟婦生男、長姁輒奪取、以爲己子、論爭三年、附於霸、霸使人抱兒於庭中、及使娣(稚婦)姁競取之、既而俱至、姁持之甚猛、弟婦恐有傷於手、而情甚淒慘、霸、乃叱長姁曰、汝貪家財、欲得此子、寧慮意頓有所傷乎、此事審矣、姁伏罪、「アラビヤ」夜譚には、一人兩妻を具せしが、兩妻同時同室に、一產婆に助けられて分挽し、生まれたる男兒は活き、女兒は卽座に死しければ、兩妻一男兒を爭ふて賢相に訴ふ、賢相二婦の乳汁を空卵殼に盛り、秤り比べて、汁の重き方を男兒の母と斷定せしも、他の一婦服せず、喧嘩已

まざりければ、賢相今は其兒を二つに割て「やぶちゃん注：「さきて」」。一半を各に與と言ふに、乳汁重き女、最早争ひを止む可れば、子を他の女に與え玉へと言ふに反し、今一人の女は、願くは兒の一半を與へよと言ふ、賢相便ち「やぶちゃん注：「すなはち」」。汁輕き女を絞殺せしめ、兒を汁重き女に附すと有り (Burton, 'Supplemental Nights,' 1894, Vol. xi, pp. 51—53)、皆人の知る如く、舊約全書 (1. Kings iii, 16—20) に載せたる「ソロモン」の裁判は、此話の最古く傳はれるも者にて、色々の補刪「やぶちゃん注：「ほさん」」。添削。」を経て漢土本邦迄も入れるなるべし、又前年、坪内博士が、早稲田文學にて公表せられし、幸若の舞曲、其から淨瑠璃等に名高き百合若の話は、希臘の「ユリツセス」の傳に基くてふ考説杯、素人が日本固有の美譚と思込だる者にも、實は舶來の燒直し無きに非ざるを證するに餘有り、

「やぶちゃん注：『明治四十一年』（一九〇八年）『六月の早稲田文學、予の「大日本時代史」に載せたる古話三則」中に述し如く、古話に其土特有の者と、他邦より傳來のもの者と有り』これは本篇の三年前に雑誌『早稲田文學』第三十一号に載った熊楠の論考であるが、初出でも同じ題名であるものの、実際には正しくは「大日本時代史」に載する古話三則である。「全集」でしか読めないが、幸い、先に示した「[私設万葉文庫](#)」の「[南方熊楠全集 3](#)（雑誌論考Ⅰ）」で読むことが出来る。まず、「大日本時代史」であるが、この熊楠の論考は確信犯の投稿であつて、前年の明治四十年からこの年にかけて早稲田大学出版部から刊行された時代別に分割された歴史書で、著者も異なる（[国立国会図書館サーチ](#)の同書の検索結果ページのこちらを参照）。原本は、後の大正期の版ではあるが、[国立国会図書館デジタルコレクション](#)のこちらで全巻が読める。さて、熊楠の論考は冒頭で主に『米羹聖人の話（『平安朝史』一六一頁）、醍醐天皇哭声を聞きて婦人の姦を知りたまひし話（同、三四五―六頁）、毛利元就箭を折りて子を誡めし話（『安土桃山史』一九二―三頁）』の三つの伝承について扱ふと述べていて（但し、イントロダクションで、それ以外の事例を幾つか挙げてある）、これまた、なかなか面白い。是非読みたい。

「弘通」「ぐつう」。本来は仏教用語で、仏教が（仏教を）広く世に行われる（行わさせる）ことのみを指すが、ここは汎用使用したもの。

『「イサアク、テロロル」の原始「アリアン」人篇』いろいろな欧文文字列で試してみたが、不詳。識者の御教授を乞う。

「レッツ」不詳。同前。

「リチュアニアンス」不詳。同前。

「左大史小槻季繼記」小槻季繼（おづきのすえつぐ建久三（一一九二）年―寛元二（一二四四）年）は鎌倉中

期の官人で算博士（大学寮にあって計算・測量などの数学技術の教授職）小槻公尚の子。官位は正五位上・左大史（神祇官・太政官（弁官局）に置かれた。四等官四番目である主典相当。官位相当）。元仁元（一二二四）年、壬生流の国宗の死のあとを受けて官務となり、二十一年間に互って在職し、大宮官務家の基礎を固めたが、国宗から官務の地位とともに伝えられた所領を、大宮家のみで独占しようとしたといわれており、同家と壬生家とが相論を重ねるきっかけを作っている。他に修理東大寺大仏長官・備前権介・紀伊守・筑前守などの地方官を兼任している。但し、現在のこの「左大史小槻季継記」として流布している日記は、実は季継の息子の秀氏の日記であることが判明している。[「書陵部所蔵資料目録・画像公開システム」の「歴代残闕日記」（第三十八巻）](#)の「33」コマ目（左頁五行目）に当該部を発見した。明治期の写本で非常に読み易い（但し、熊楠は孫引きで、「古事類苑法律部第一冊、一一七三頁に、此記を引き」（後掲する）とある。左ページ三行目から）。電子化しておく。【】は右傍注。カタカナは概ね右寄りに小さいが、同ポイントで示し、記号・句読点などを施し、一部に推定の読みを施し、段落を成形して読み易くした。また、一部は後人によって朱で訂された方を採った。

*

二、
太政大臣實基公【嘉祿元年十一、補。】、檢非違使別當ノ時、八歳男子ヲ、二人ノ女、面々

「我子。」

ノ由ヲ稱シケル間、法曹輩、計申云、「任法意旨、三人ガ血ヲ出テ、流水ニ流ストキ、眞實ノ骨肉ノ血ハ、末ニテ一ニ成リ、他人ノ血氣ハ末ニテ別ナリ。如此、可沙汰。」

之由、計申處、大理云、

「八歳者、可血之條、尤不便事也。今度、沙汰之時、彼三人并諸官等、可參。」之由、被仰テ、其日、遂不被決雌雄。

後、沙汰日、彼三人・諸官等、令參之時、數刻之後、大理出座、被仰云、

「件女性、兩人シテ、此男子ヲ引テ、引取ラムヲ、母ト可用。」

由、被計ケル時、二人シテ、此子ヲ引ケルニ、被引テ損セントスル時ハ、一人ノ女ハ、放チ、今一人ハ、只、引勝トス。如此スル事、度々。

其時、大理云、

「放ツル女は實母也。イタハルニヨリテ、此如、放モノ也。今一人ハ無勞心、只、勝ント思心計ニテ引也。」云々。

無相違、放ツル女ハ母也。當座、被引ハ荒ニハ似タレト「やぶちゃん注」当初、二人の女に引つ張らさせたのは荒っぽい仕儀には、一見、見えるけれども。」「思慮ノ深キトコロ也。

實基公ハ法曹ニ達スル人也。

*

「太政大臣實基」徳大寺実基（建仁元（一二〇一）年～文永一〇（一二七三）年）は鎌倉中期の公卿で従一位・太政大臣。

「嘉祿元年」一二二五年。

「十一月十日補せらる」これは一見誰もが太政大臣へ補任の年月日と思ってしまいが、彼が太政大臣となるのは、ずっと後の建長五（一二五三）年十一月二十四日である。では、これは誤記かと言うと、そうでもない。日付はちょっと違うが、この嘉祿元年十一月十九日に権中納言・左衛門督を兼ねて検非違使別当に補されているからである。

「荒ふには似たれども」この「荒ふ」は初出も同じである。「選集」では「荒（やぶ）る」と勝手に送り仮名まで変えてルビを振るが、こんなことは許されない。私は「荒っぽい仕方をする」の意の「あらぶる」の「る」の脱字か、「すさぶ」の「ぶ」の誤植ではないか疑っており、その次に熊楠の当て訓で「あらがふ」かと思う。それは「荒ふ」に相当する和語の動詞が存在しないからである。そもそも「やぶる」は正規の訓や意味はないから、実は話にさえならぬのである。どうしてこうした改変や、おかしい当て訓が編集方針の中でまかり通るのか私には全く以って不思議でならないのである。因みに、原本は「故事類苑」版でも「荒ニハ」であるから、私は「あらきには」と気持ちよく訓読したのである。

「故事類苑法律部第一冊、一一七三頁に、此記を引き、次に風俗通を引て云」「故事類苑」が明治期に政府が編纂した類書（百科事典）。本文千巻。刊本は和装本で三百五十冊、洋装本では五十冊・索引一冊（昭和二（一九二七）年再版では六十冊）。明治一二（一八七九）年に西村茂樹の建議で文部省に編纂係が設けられ、刊行開始は明治二十九年にずれ込み。大正二（一九一三）年になってやっと完結した。内容は歴代の制度・文物・社会百般に互って多くの引用を示してある。天・歳時・地・神祇などの三十部門に分類されてある。現在、[「PukiWiki 故事類苑全文データベース」](#)・[「故事類苑データベース」](#)・[「国際日本文化研究センター・古事類苑ページ検索システム」](#)が起動している。それぞれに使い勝手に合わせて私は頻繁に使用させて貰っている。お試しあれ。「風俗通」は後漢末の応劭の撰した「風俗通義」の略称。さまざまな制度・習俗・伝説・民間信仰などについて述べたもの。但し、散佚しており、以下のように他書に引用された断片が残る。さてもそれを「[日文研](#)」の「[古事類苑ページ検索システム](#)」のこちらで、[当該箇所の原本画像を視認出来る](#)。以下、原文をまず電子化し（句読点を一部追加し、返り点は除去した）、後で訓読する。

*

〔棠陰比事上〕黄霸叱奴

前漢、潁川太守黃霸、本郡有富室、兄弟同居、弟婦懷妊、其長姒亦懷妊、胎傷匿之、弟婦生男、長姒輒奪取、以爲己子、論爭三年、訴於霸、霸使人抱兒於庭中、及使娣【音弟、稚婦曰娣】・姒競取之、既而俱至、姒持之甚猛「やぶちゃん注」・「持」は底本は「埒」で、これはおかしい。初出は「埒」（音「ラツ」）で、「選集」も「埒」となっている。後者は漢文脈を勝手に訓読しているが、そこでは『埒く』と訓じている。しかし、これもちょっとおかしい。何故なら、この漢字は「なでる」「扱く」「抜き取る」の意であるからである。ちょっと変だ。御覽の通り、「古事類苑」は「持」である。さらに本當の引用元である「棠陰比事」を複数見たところ、やはり「持」である。「持」には「握る・持ち合う」の意があるから納得出来る。されば、「持」を採った。」、弟婦恐有傷於手「やぶちゃん注」・「手」は底本では「乎」であるが、おかしい。初出も「選集」も「手」であり、御覽の通り、「古事類苑」も「手」であるので、特異的に本文を訂した。」、而情甚悽慘、霸、乃叱長姒曰、汝貪家財「やぶちゃん注」・「貪」は底本では「貧」。初出・「選集」・「古事類苑」は孰れも「貪」であるから、これも本文を訂した。」、欲得此子、寧慮意伏罪【出風俗通】。「やぶちゃん注」・底本は最後が「寧慮意頓有所傷乎、此事審矣、姒伏罪」。後注参照。」

*

〔「棠陰比事」上〕「黃霸叱姒」

前漢の潁川太守黃霸あり。

本郡に富室有り。兄弟、同居す。弟婦「やぶちゃん注」・弟の妻。」、懷妊す。其の長姒「やぶちゃん注」・兄の妻。』も亦、懷妊するも、胎、傷れ、之れを匿す。弟婦、男を生みしに、長姒、輒ち、奪ひ取り、以つて己れが子と爲す。

論争すること三年、霸に訴ふ。

霸、人をして、庭中にて、兒を抱かしめ、及ち、娣【音「弟」。「稚婦」「やぶちゃん注」・弟の妻。】を「娣」と曰ふ。』・姒、競はせて、之れを取らしむ。既にして俱に至り、姒、之れを持すこと、甚だ猛し。

弟婦は、手を傷つくること有るを恐れ、而して、情、甚だ悽慘たり。

霸、乃ち、長姒を叱りて曰はく、

「汝、家財を貪り、此の子を得んと欲す。寧ぞ、慮意あらんや。」

と。罪に伏す。【「風俗通」に出づ。】

*

・「潁川」 当時は現在の河南省禹県を指した。

・「太守」 郡州の長官。

・「黃霸」 第九代宣帝（在位：紀元前七四年～同四八年）の時に廷尉正（刑罰・司法を管轄

する職」となり、一時期、冤罪で獄に繋がれたが、後に拔擢され、潁川太守となり、さらに丞相に登りつめた。漢代の治民の名官吏として知られる（ここは所持する岩波文庫「棠陰比事」（一九八五年刊）駒田信二訳の注に拠った）。

それでも、冒頭にある通り、引いた書である「棠陰比事」^{とういんひじ}は宋の桂万榮の著になる裁判記録集で、一二〇七年成立。中国古今の名裁定百四十四件の判例を、暗唱しやすいように四字の韻語で標題して収録する。日本にも早くから伝えられ、井原西鶴の「本朝櫻陰比事」（元禄二（一六八九）年板行）や知られた「大岡政談」（実録体小説。名奉行大岡忠相の裁判を主題とし、「天一坊」「白子屋阿熊」など十六編の話からなるが、史実とは無関係のものが多く、完全な推理小説的創作である。人情と機知に富んだ古今東西の裁判の話を江戸時代のものに巧みに改変・脚色している。原作者は不詳。江戸期の講釈に起源を持つ）などに影響を与えた。原本のそれは「上」の以下。頭に同じ事例の枕がある。「[中國哲學書電子化計劃](#)」内の「棠陰比事」（四明叢書）の**原本画像**から起こした。

*

李崇還泰黃霸叱奴

後魏李崇爲揚州刺史縣民荀泰者有子三歲失之後見在趙奉伯家各言己子竝有鄰證郡縣不能斷崇乃令二父與兒各禁數日忽遣獄吏報兒暴卒泰聞之悲不自勝奉伯嗟歎而已遂以兒還泰奉伯伏罪

漢時潁川有富室兄弟同居弟婦與長奴皆懷妊長奴胎傷弟婦生男輒奪以爲己子爭訴三年郡守黃霸使人抱兒於庭令娣奴競取之長奴持之甚猛弟婦恐有所傷於手霸乃叱長奴曰汝貪家財欲得兒寧慮頓有所傷乎乃以兒還弟婦出【出風俗通】

*

この末尾部分が熊楠の記すものとほぼ一致する。さらに探してみたところ、[この近代中国語の本書（全編）の版本画像（PDF）の10コマ目にあるものの末尾が、](#)

*

「汝貪家財、欲得此子、寧慮意頓有所傷乎。此事審矣。」奴伏罪。

*

と完全一致することが判った。

*

「汝、家財を貪り、此の子を得んと欲す。寧ぞ頓に傷つくる所有るを慮り意はんや。此の事、審らかなり。」
と。奴、罪に伏す。

*

やっと、気が晴れた。

「Burton, Supplemental Nights, 1894, Vol. xi, pp. 51—53.」 原本確認出来ず。

「舊約全書 (I. Kings iii, 16—20) に載せたる「ソロモン」の裁判」「旧約聖書」「列王紀上」の第三章の「16」から「28」。[「Wikisource」の「列王紀上（口語訳）」](#)（一九五五年日本聖書協会刊）の当該部を読みたい。

「前年、坪内博士が、早稲田文學にて公表せられし、幸若の舞曲、其から淨瑠璃等に名高き百合若の話」室町時代の幸若舞を起源とするとされる貴種流離譚の一つ「百合若」伝説の主人公「ゆりわかだいじん」と「ユリシーズ」の発音の類似や、話の展開の各所に見られる類似性から、現在でも「ユリシーズ」起源説が語られるが、その先鞭をつけたのが、坪内逍遙が明治三九（一九〇六）年一月に『早稲田文學』発表した「百合若傳説の本源」である。

[国立国会図書館デジタルコレクションの坪内逍遙の論集「文藝瑣談」（明四十年春陽堂刊）の画像でここから視認出来る。](#) ウィキの「百合若大臣」によれば、そこで『坪内逍遙は、古代ギリシアの詩人・ホメロスが謡った叙事詩「オデュッセイア」がなんらかの形で（あるいは室町時代にポルトガル人の手により）日本に伝えられ、それが翻案されたものが「百合若大臣」であるとの説を』提唱し、『オデュッセイアのラテン語での発音「ユリシス」と「百合」が似ていることや、主人公・オデュッセウスの留守を守る妻・ペネローペーが織物をして時間を稼ぎ、求婚者をかわす逸話が、百合若の妻の行いを思わせるからであ』った。『坪内は、伝来の道筋として「いずれの国人」にもたらされたか不明であると断りながら、あるいは「堺や山口を経」たものとの思いつきに達したとする』。『これは室町時代にやってきた「南蛮人」・「ポルトガル人宣教師」による伝播説だと捉えられている』。なお、『南蛮伝播により強く執着したのは、この坪内よりも』言語学者で「広辞苑」編集やキリシタン文献の研究でも知られる者新村出『しんむらいうずるであつた』（後の大正四（一九一五）年刊「南蠻記」（東亜堂書房）。しかし、『この説は』その後、『津田左右吉、柳田國男、高野辰之、和辻哲郎などによって鋭く排撃されて』おり、『この型の説話の分布は広く、偶然の一致として懷疑的に見る意見がある』点、『また、百合若の初演が』天文二〇（一五五二）年で『ポルトガル人による種子島銃の伝来からわずか』七『年あまりで』、かくも『完成度の高い翻案を不可能と目す論旨がある』。一方、『坪内との同調派には、新村出にくわえて、アメリカ出身のE・J・ヒツバード（同志社女子大学教授）があり、また日系人のジェームス・J・アラキがいる』。『アラキは、たとえ初演が』一五五一年であつたとしても、その前年頃に『ザビエル神父の通訳ファン・フェルナンデズによって伝承された』と考える『ことは可能であると力説し』、『これに賛意を唱えた論文も』近年『新たに出て』おり、賛同派は「ユリシーズ」と「百合若」のみが、『いくつものモチーフが段ごとに連綿として一致する酷似性があると強調す

る。『ただ、最古の記録が』一五五一『年というアラキ等の前提』は既に『覆されており』、永正一一（一五一四）年の「雲玉和歌抄」に『詳しい言及があることが今では判明しているため、ポルトガル人伝来説は困難となっている』。『しかし』、坪内逍遙や『新村出の「南蛮人」伝来説を』、『より広義的にとり、例えば』、『アジアに到達したイスラーム教徒を媒介したものだとするれば、可能性は十分にあり、このことは既に南方熊楠に指摘されている』（本篇のこの部分から、以下の段落での考察を指す。まだ続くので注意されたい）。『井上章一も』、逍遙の言う『南蛮時代に伝来したという説は成り立たないが、ユーラシア大陸全体に、前史時代に広まった説話の一つと見るのが妥当だろうとして』おり、『中央ユーラシアの叙事詩』『アルパムス』と『類似しており、これがユリシーズ伝説との中間的な媒体だった可能性も指摘されている。甲賀三郎伝説も、これと同じようなアジア経由をたどったのでは』ないかと、『大林太良などは推察』している、とある。

「ユリツセス」「ユリシーズ」。ギリシア神話の英雄で、イタケーの王であり、ホメーロスの叙事詩「オデュッセイア」の主人公オデュッセウスの物語。ラテン語で「Ulixes（ウリクセス）」或は「Ulyseus」（ウリュッセウス）ともいい、これが英語の「Ulysses」（ユリシーズ）の原型である。」

予は田舎に居り、件の坪内博士の論を見ず、纔に其概略を友人より聞しのみなれば、姑く「やぶちゃん注…「しばらく」。」其後、自分の思ひ中りし事共を記さんに、百合若の譚、本邦の古物語や謡曲に見えず、江戸幕府初りて後、屢ば聞ゆ、（甫庵の豊臣記巻五に、天正十五年正月二日、秀吉朝飯後休む事、百合若大臣軍に疲れ、熟睡せられしにも越たり、宗像軍記に、大宮司氏重、高向某に、織幡山神社の來歴を問ふ、答る詞の中に、百合若大臣の、故郷に放つ鷹島や、とあり、延文三年即ち尊氏死せし歳の事乍ら、此詞は、遙か後に編者が潤色せるならん）戦國時代、幸若の舞普く持囃され、談客援て「やぶちゃん注…「ひきて」。」以て話柄と爲し事夥し（甲陽軍鑑、湯淺常山の文會雜記等を見よ）されば百合若の傳に、「ユリツセス」の傳と相似の點多きのみならず、主人公の名又相似たるを見れば、誠に博士の説の如く、其頃南蠻人が齎したる、希臘の舊譚が、日本に轉化されて、百合若の物語と成り、幸若の舞題に用ひられて、盛んに人口に膾炙したるなるべし、

「やぶちゃん注…前段で注した通り、坪内逍遙が明治三九（一九〇六）年一月に『早稻田文學』発表した「百合若傳説の本源」は、[国立国会図書館デジタルコレクションの坪内逍遙の論集「文藝瑣談」（明四十年春陽堂刊）の画像でここから視認出来る。](#)

「甫庵の豊臣記」小瀬甫庵（おぜほあん）（永禄七（一五六四）年～寛永一七（一六四〇）年）は安土桃山から江戸初期にかけての儒学者・医師・軍学者で、「特に「太閤記」「信長記」の著者として知

られる。名は道喜（どうき／みちよし）。甫庵は号。[彼のウィキ](#)によれば、『美濃土岐氏の庶流で、尾張国春日井郡の出身であるという』。坂井氏の養子となったといい、後に土肥氏を名乗り、最後に小瀬氏に改めた』。当初は、『医学と経史を学んで、織田氏家臣の池田恒興に医者として仕え、その死後は豊臣秀次に仕えた』。文禄四（一五九五）年の『秀次の死後には活字本「補注蒙求」など』『の医書を刊行している』。「関ヶ原の戦い」の後、『堀尾吉晴に仕え』、『松江城築城の際に』は『縄張りも行った。吉晴死後は浪人となったが、播磨にしばらく住み、京都に移った』。寛永元（一六二四）年には『子の小瀬素庵が前田利常に仕えた縁で』、『加賀藩で知行』二百五十『石を貰い、藩主の世子光高の兵学の師となった』。太田牛一著「信長公記」を元に「信長記」を書いた後の、寛永五（一六二八）年から同年代にかけて「太閤記」を板行しているところなのが、この「豊臣記」である。但し、一方、[ウィキの「太閤記」](#)を見ると、『初版は』寛永三（一六二六）年とし、全三十巻で、各種の「太閤記」の中では最も有名なものが本書であるとし、『作者の名をとって』「甫庵太閤記」とも称するとあって、『江戸時代に幾度か発禁にされたが、以降も版を重ねている』。『秀吉伝記の底本とされることが多いが、著者独自の史観や』、『それに基づく史料の解釈、改変も指摘されており、前の引用に出た通り、『加賀藩で俸禄を給っている関係からか』「賤ヶ岳の戦い」に於ける『前田利家の撤退について』、『名前が記載されていないなかったり、前後の関係を無視して唐突に前田利家の活躍が挿入されている箇所も見られる』とある。熊楠が言っているのは、[ここ](#)（[国立国会図書館デジタルコレクション](#)の正保三（一六四六）年版「太閤記」第五・六巻の画像）の右頁後ろから二行目から左頁一行目。但し、熊楠の「天正十五年」は「天正十一年」の誤りである。これは「選集」でも直されていない。

「朝飯後休む事、百合若大臣軍に疲れ、熟睡せられしにも越たり」以上のリンクで示した部分、判読し難いが、熊楠の読みは正確でないので、判読を試みると（「」は私の推定の読み。一部に記号と濁点を添えた）、

*

其御後、二日に、午に眼しかば、朝餉、祝し給ひて、休み給ふ、「ゆりわか大臣」、軍に、しつかれ、熟睡せられしにも、越たり。

*

であろう。

「宗像軍記」元禄一七（一七〇四）年板行。作者不詳。筑前宗像大神宮の宮司宗像氏の武将としての活躍を中心に、大明神の縁起から、戦国後期の宗像大社第七十九代大宮司で宗像氏本流最後の当主で戦国大名であった宗像氏貞（天文一四（一五四五）年～天正一四（一五八六）年）の死去までを記した軍記物。[当該部は国立国会図書館デジタルコレクションの「史](#)

『籍集覽』の第十五冊の画像で確認出来る（左ページ四行目）。ここは宗像大社の歌枕として

のそれを繋げて示して連綿たる歴史を示す部分である。百合若大臣伝説には鷹が重要な役割を持つ。面倒なので、ここでウイキの「百合若大臣」を引いて説明に代える（太字下線は私が附した）。

『百合若大臣は、蒙古襲来に対する討伐軍の大將に任命され、神託により持たされた鉄弓をふるい、遠征でみごとに勝利を果たすが、部下によって孤島に置き去りにされる。しかし鷹の緑丸によって生存が確認され、妻が宇佐神宮に祈願すると帰郷が叶い、裏切り者を成敗する、という内容である』。最もルーツに近い全篇と考えられる「幸若舞」の「百合若大臣」のシノプシスは以下。彼の『父親は、嵯峨朝の左大臣「公満（きんみつ）」で、大和国の初瀬寺』『の観音に祈願して授けられた男児が後の百合若大臣である』。『百合若は』十七『歳で右大臣に就任し、大納言章時（あきとき）の娘を妻に迎える』。『百合若は、日本（博多）へ押し寄せてきた蒙古（むくり）』『の大軍討伐を命じられ、当地である筑紫』『の国司という任地を与えられる。妻は豊後国』『に構えた館に残す。託宣に従い、百合若は八尺五寸の鉄弓と』三百六十三『箭の矢を持たされる』。『蒙古軍は、すでに神風に遭って唐土（もろこし）』『に引き上げていた。百合若は船団を従えてこれを追い、ちくらが沖の海上で決戦となる。蒙古側は、麒麟国の王が青息を吹いて霧をたちこめらすが、百合若が日本の神々に祈願すると』、『ようやく霧が晴れる。百合若は矢をほとんど撃ち尽くして奮戦し、蒙古側の四大将の両蔵（りょうぞう）らを討ち取り、あるいは捕虜となし勝利をおさめる』。『百合若は、玄界ガ島』『に立寄って休息し、その大力を発揮したときの常として、まる』三『日間眠りこける』。『これに乗じて、配下の別府兄弟は、百合若は矢傷で死んだと偽り、船を引き揚げさせ、百合若を孤島に置き去りにしてしまう。別府兄弟は朝廷に戦勝を奏上し、別府太郎は、百合若が配されていた筑紫の国司の役目に任命される』。『上司の地位篡奪に収まらず、別府太郎はさらに百合若の御台所に恋愛を迫る』。『御台所は、宇佐神宮で千部の写経を行っている最中だとして、とりあえず返答を引き延ばす。しかし百合若がついに帰らなければ自殺すると決めているので、身の回りの琵琶や琴を整理し、飼っている犬、馬や鷹の数々を解き放つ。このとき』、『緑丸という鷹は、玄界島まで飛んでゆき、百合若に託されて柏の葉に血で書いた文を持ち帰る。御台所は、夫の生存を知り、墨や硯などを鷹に結びつけて送り返すが、鷹はこの重さに耐えかね、死体』』となって島の百合若のもとへ『漂着する』。『宇佐神宮に、御台所が夫の生還を祈願すると、その願いがかない、壱岐の浦にいた釣り人が風で流され、玄界ガ島にいた百合若を発見して、日本の本土に送り戻す。着いた場所は博多であった。百合若のあまりの変わり果てように、誰もその正体がわからない。別府は余興としてこの奇異なる男を召し抱えることにし、門脇の翁という者に預ける』。『この頃、別府は御台所がなびかないので、ついに処刑すると決めていた。しかしそうはさせまいと、門脇の翁

の娘』『が身代わりになったことを百合若は知る』『正月になり、宇佐八幡宮での初弓で、百合若は「苔丸」という名で呼ばれて矢取りの役を仰せつかる。面々の弓の技量を嘲弄した百合若は、別府に一矢射て見せよと命令される。揃えられた強弓はゆるいと言って、ついにはかの鉄の弓をもってこさせ、みごとこれを引き絞り』『自分は百合若である』『との』『名乗りを上げる。大友氏の諸卿や松浦党はかしこまり、別府太郎は降参するが』『許さず、百合若はこれを縛り上げさせ、手づかみで舌を引き抜き、首切りは』七『日かけて鋸挽きの刑に処した』『。命の恩人の釣り人には壱岐と対馬国を下賜し、門脇の翁は筑紫の荘園の政所の職につけ、百合若は、京に上り』『。將軍となった』『。幸若舞の歌詞の板行原本もネット上にあるが、これは、流石に甚だ読み難い。そこで、私は国立国会図書館デジタルコレクションにある大正九（一九二〇）年金文堂書店刊の竹田秋楼著「博多物語」に所収する、非常に読み易く解説し、しかも細かな部分まで行き届いている「百合若大臣の歌」を強くお勧めするものである。

「大宮司氏重」宗像大社第五十六代大宮司宗像氏重。先の「宗像軍記」によれば、前々代の宗像重俊の子とある（「叔父氏名ノ譲リヲ受テ社務トナル」とする）。代五十五代は宗像氏頼。「高向某」同じく先の「宗像軍記」によれば、以下の「織幡ノ神社」の「神職高向民部」とある。

「織幡山神社」宗像市鐘崎にある織幡（おりはた）神社（グーグル・マップ・データ航空写真）。宗像大社境外摂社である。画像は南西の宗像大社（辺津宮）との位置関係が判るようになっている。

「延文三年」南朝正平十三年で、ユリウス暦一三五八年。

「尊氏死せし歳の事」延文三年四月三十日（ユリウス暦六月七日）、足利尊氏は享年五十四で亡くなっている。

「甲陽軍鑑」江戸初期に集成された軍学書。全二十巻。甲斐の武田晴信・勝頼二代の事績によって、甲州流軍法や武士道を説いたもの。異本が多く、作者は諸説あるが、武田家の老臣高坂弾正昌信の遺記を元に、春日惣二郎・小幡下野おぼたしもりけが書き継ぎ、小幡景憲が集大成したと見られている。現存する最古の板本は明暦二（一六五六）年のもの。

「湯浅常山の文會雜記」備前岡山藩士で古文辞学派の儒学者で荻生徂徠の高弟服部南郭の門下であった湯浅常山（宝永五（一七〇八）年～天明元（一七八一）年）が徂徠学派の言行を纏めた随筆。天明二（一七八二）年宮田金峰序。

以下の段落は底本では、さらに二字下げとなり、ポイントさえ落ちている。則ち、補説である前段の、そのまた補記の意味合いである。熊楠らしいダラダラであるが、見た目の変化を加えてあるだけマシである。」

「ユリツセス」故郷に歸りて、不在中其妻「ペネロペ」を競望せし輩と、射を試み、勝て彼輩を射殺せし弓は、無双の射手「ユリツセス」が手馴せし物也、其事略「やぶちゃん注」『ほぼ』。射場某が、寛文中、備前酒折の社所藏の、百合若の鐵弓箭を試しおほせたるに似たり、（和漢三才圖會卷七八）、「ユリツセス」の名亦百合若に近し、奸人の張本別府と有るは、偶ま「アンチノウス」と「ペネロペ」を混じ違へたるやらん。

「やぶちゃん注」ユリシーズ（オデュッセウス）の流離の果ての帰国の後の話は、[ウィキの「オデュッセウス」](#)から引く。オデュッセウスが、やっと故郷へと故国イタケーに帰国して見ると、『妻ペーネロペーに多くの男たちが言い寄り、その求婚者たちはオデュッセウスをもはや亡き者として扱い、彼の領地をさんざんに荒していた。オデュッセウスはすぐに正体を明かすことをせず、アテーナーの魔法でみすばらしい老人に変身すると、好き放題に暴れていた求婚者たちを懲らしめる方法を考えた。ペーネロペーは夫の留守の間、なんとか貞操を守ってきたが、それももう限界だと思い、「オデュッセウスの強弓を使って』十二』の斧の穴を一気に射抜けた者に嫁ぐ』と皆に知らせた。老人に変身していたオデュッセウスは、『これを利用して求婚者たちを罰しようと考えた』。求婚者たちは矢を射ろうとするが、あまりにも強い弓だったため、弦を張ることすらできなかった。しかし、老人に変身したオデュッセウスは弓に弦を華麗に張ってみせ、矢を射て』総て『の斧の穴を一気に貫通させた。そこで正体を現したオデュッセウスは、その弓矢で求婚者たちを皆殺しにした。求婚者たちも武装して対抗しようとしたが、齒が立たなかった。こうして、求婚者たちは死に、その魂はヘルメスに導かれて冥界へと下って行った』。『ペーネロペーは、最初のうちはオデュッセウスのことを本物かどうか疑っていたが、彼がオデュッセウスしか知りえないことを発言すると、本物だと安心して泣き崩れた。こうして、二人は再会することができたのである』。

「射場某が、寛文中」（一六六一年～一六七三年）「備前酒折」（さかをり）「の社所藏の、百合若の鐵弓箭」（ここでは「和漢三才図会」の記載との対照（後掲）から「てつのゆみ」と仮に当て訓しておく）を試しおほせたるに似たり、（和漢三才圖會卷七八）「和漢三才圖會」の地誌部の卷第七十八「備前」の「當國神社佛閣名所」の二番目に「酒折の社 さかおり 岡山の石關に在り」として挙げて解説した最後に（原本から訓読して示した）、

*

相傳ふ、百合若ゆりわか、持つ所の鐵弓、當社に納む。未だ然る由來を知らざるなり。人、之れを引くこと能はず、以つて奇と爲すと。而して寛文年中、當國武臣射場いばの藤大夫といふ者有り、世に鳴る。是に於いて、試みに、之れを引き、難しと爲さず、且つ、之れを挽き折り納むと

云々。

*

この「酒折社」は現在の岡山県岡山市北区石関町にある岡山神社である。この話は、大拙東華（人物不詳）の随筆「齊諧俗談」（宝暦八（一七五八）年刊）の卷之三にも以下のようにある（吉川弘文館随筆大成版を参考に、漢字を恣意的に正字化し、読みを総て推定で歴史的仮名遣で示した）。

*

○百合若丸之弓

備前國赤坂郡酒折石上の社に、百合稚丸の鉄弓あり。人、是をひくことあたはず。しかるに、寛文年中、當國の武臣射場藤太夫といふ人、世に聞し強弓なり。この人、試にかの弓を引て難とせず。終に此弓を引折て納むと云り。

*

「アンチノウス」ローマ皇帝ハドリアヌスの愛人として寵愛を受けた夭折した青年アンテイノウス（Antinous 一一年～一三〇年）のことぐらいしか浮かばない。「ユリシーズ」（オデュッセウス）の物語に近似音の名前は見出せない。

以下、底本では再び一字下げに戻る。」

但し南蠻人の名は、必しも歐洲人に限らず、歐人初て来たりしより百五十餘年前、南亞細亞の回教國民、若狹に著せし等の例、渡邊世祐氏の室町時代史三二〇―二三頁に見えたり、采覽異言卷三に、明の章潢の回々館の記を引き、如占城日本眞臘瓜哇滿刺加諸國、皆習回教、遇有進貢番文、亦屬本館代譯と云り、回々教國ならぬ日本の假字書も、都合上回々館にて扱しと見え（大英類典二二卷六五九頁に、日本を回教國とせり、四年前三月二日の「ノー・ツ・エンド・キリス」に、予一書を投じ、其出所を問しも、今迄答る者無し、件の明人の記杯に據る誤傳ならんか）、允澎入唐記、享徳二年十月十三日、南蠻瓜哇國人百餘人、在館求通信於日本とあれば、邦人當時、海外で回教民と交りしを知るべし、爾前回教勃興して、亜刺伯人「やぶちゃん注…「アラビアじん」。」全盛の時、古希臘羅馬の文字、歐洲に亡て、彼輩に保存されたりてふ程なれば、邦人海外に赴きて回教民より傳へたる、古歐洲の物語少々には非じ、棚守房顯手記に、百合若の父公光の筆策「やぶちゃん注…「ひちりき」。」、嚴島に存すと云ひ、鹽尻、帝國書院刊本、上卷六六四頁に、百合若、豊後國船居に傳る故事なりとて、之に關せる遺蹟を列ね、紫の一本に肥後に百合若塚あり、土人云、百合若は賤き者也、世に大臣と云、大人也、大太とも云、大人にて、大力有て強弓を引き、能く礮を打つ、今大太ぼつちとは、百合若の事也、ぼつちとは礮の事也とぞと云り、（四十一年四月十五日

の東洋學藝雜誌、予の「ダイダラホウシの足跡」(參看)、是れ等は、本邦固より斯る巨人の俚傳有しに、後世百合若の名を附會し、隨て遺物遺跡杯と故事付けたるにや、松屋筆記、卷九三、豐後國志に、百合若は、大分君稚臣「やぶちゃん注」：「おほきだのきみわかおみ」が事、是れ天武紀に見たる勇士、豐後大分郡の人也と云るも、其名より臆測したる牽強らしく思はる。

「やぶちゃん注」：途中の「杯」が二箇所「杯」となっているが、初出・「選集」で訂した。また、「回」「回」が混用されているのはママである(初出は総て「回」)。

「渡邊世祐氏の室町時代史三二〇―二三頁に見えたり」これは既に注した早稲田大学出版部から刊の時代別に分割された歴史叢書「大日本時代史」(「[国立国会図書館サーチ](#)」の[同書の検索結果ページのこちらを参照](#))の一冊。原本は、後の大正期の版ではあるが、[国立国会図書館デジタルコレクションのこちらで全巻が読め](#)、ここで熊楠が示すのはこれ。著者は日本史学者渡邊世祐(よすけ 明治七(一八七四)年―昭和三二(一九五七)年―山口県生まれ。明治大学・國學院大學教授。文学博士)。しかし、[このページ数は誤りのようにも思われる](#)(大正版が初版と同ページとしてで、初版の版組みはズレているのかも知れぬ)。「二五二」ページから「二五三」ページの「第二編 室町全盛時代 第七章 室町盛世の外交」の一番最後の「第六節 琉球及び諸外國との交通」の「第二 外國との交通」の内容がまさにそれだからである(このページ数は「選集」版も変わらない)。その「二五五」ページの後ろから六行目の段落に、

*

かく南北朝の末より亞刺比亞人と思はるゝ人既に歸化せり。これ幸に大乘院雜事記のあるありて其名を知ると雖ども他に中國及び鎮西地方にも此等と類似の人も亦歸化せしならんも記録なければ知り難し。又若狹守護職次第【群書類從にあり】にも「應永十五年十一月十八日大風に那珂湊濱へ打上られて南蠻船破損之間同十六年に船新造。同十月十一日出濱ありて渡唐了」とあり、又若狹國稅所今富名領主代々次第【類集「やぶちゃん注」ママ。】中に收む】にも此事を一層詳細に書けり、乃ち同十五年六月二十二日に南蕃船着岸。帝王御名亞烈進卿。蕃使使臣【間丸本阿】彼帝より日本の國王への進物等生象一匹【黒】、山馬一雙、鸚鵡二對、其外色々。彼船同十一月十八日大風にて中湊濱へ打上げられて破損云々」とあり。この南蠻の王名及び進貢物に付き考ふるもこの本國は印度若くは馬來半島近傍にありしならん。而してこの南蠻の國王より使聘を我邦に致せしなり。而して其使船は行路を誤りて若狹に嫡せしなり。元來南蠻とは西洋人の東洋に渡來せる者を稱して云ひしなれどもこの頃其意味は博げられ南洋印度若くは西洋人に對しても一般に南蠻人と稱せしなり。この南蠻船の來航に付き考ふるに亞細亞の一王は日本と交通する事を望みしなり、乃ちこれ外國人が貿易を日本に求めんと

せし事なり。斯る時勢なれば當時ヒシリなどと同じく漂流船若くは貿易船にて我國に渡來せし外國人尙ほ多いかりしならん。

*

とあるのを熊楠は指しているからである。「ヒシリ」というのは「靈知り」などと当てて怪しげな説明をしている記事が多いが、[サイト「イスラーム文化」のこちら](#)の、小村不仁男氏著の「本イスラーム史・戦前、戦中歴史の流れの中に活躍した日本人ムスリム達の群像」(昭和六三(一九八八)年・東京・日本イスラーム友好連盟刊)の「第三章 室町時代」に、まさに以上に事件を記した「アラビア人と国際結婚した京の女性」を始めとして、「アラビア商船と琉球列島」・「京に伝わる七百六十余年昔のイラン文の古書」・「真言宗の大本山にイスラムの秘宝が」と標題する記事が続き、その一番最後に、「六百年昔に京で日本人女性と国際結婚したアラブ人第一号」とあって、

《引用開始》

今から約六百年も昔に京都のご真中にひとりのアラビア人が住んでいた。場所は三条坊門烏丸で、現在の中京区御地烏丸付近にあたり、ちょうど京都市役所から南へ万メートルあるかないかの近距離のところである。室町初期の將軍足利義満の頃のことと、その名はヒシリと一般に呼ばれていたが、京都五山の一つである相国寺の僧絶海中津らが留学先の中国(明)から京へ連れて帰ってきたのである。永和二年(二二七六)のごとく南北両朝の対立抗争のさ中であつた。

彼は日本に入国後に摂津の楠葉つまり今の大阪府下枚方市樽葉在の一日本婦人と結婚して二兎「やぶちゃん注」…「兎」或いは「男」の誤りか。」をもうけた。長男はムスルと呼ばれいわゆる日ア混血児である。このムスルとはムスリムかあるいはアル・マウシルの転化ではなからうか。

さて、ムスルはその後母方の姓を採って楠葉入道西忍と名乗り、次男は民部卿入道と呼んだ。次男には子供ができなかったが、長男のムスルには三人の男児が出生した。

ムスルは義満の次の四代將軍義持に重用された。彼が海外事情とりわけ明の国情に詳しくその上に航海術に精通していたからである。三十六本のをき以来「やぶちゃん注」…意味不明。

「三十六歳のとき」か。「再三にわたり父ヒシリゆかりの明の国に渡航して足利幕府の海外通商貿易の今くいう「やぶちゃん注」…「でいう」か。」顧問のような役職に就任していた。

彼は義持將軍の没後隠退してからは大和(奈良県)の古市に転居し文明十八年(一四八六)に、九十三才の天寿を全うして長逝したと伝えられている。以上は「大乘除寺社雜事記」という史料に所載されたものの中からの摘記である。

《引用終了》

とあったので氷解した。

「采覽異言」(さいらんいげん) は新井白石が宝永五(一七〇八)年に布教のために来日したイタリア人宣教師ジョバンニ・シドッチ (Giovanni Battista Sidotti (Sidoti)) 一六六八年(正徳四(一七一四)年十一月二十七日・牢死)を尋問して得た知識などを基に著わされた日本最初の組織的世界地理書。マテオ・リッチの「坤輿万国全図」や、オランダ製世界地図などの多くの資料を用い、各州名国の地理を説明しながら、所説に典拠を明らかにしたもの。全巻を通じ、世界各地の地名、その他の地理的称呼をマテオ・リッチの漢訳に倣い、「歐羅巴(エウロパ)」「ヨーロッパ・卷之一」・「利非亞(リビア)」「アフリカ・卷之二」・「亞細亞(アジア)」「卷之三・上下」・南亞墨利加(ソイデアメリカ) (南アメリカ・卷之四)・北亞墨利加(ノオルトアメリカ) (北アメリカ・卷之五)の順に、世界各国の地理が漢文で書かれたもの。正徳三(一七二三)年の成稿であるが、その後も加筆が続けられ、享保一〇(一七二五)年に最終的に完成した。国立国会図書館デジタルコレクションで江戸後期の写本で同巻が見られるが、二度ざっと見たが、この文字列は見当たらなかった。

「章潢」(一五二七年～一六〇八年)は明代の学者。江西南昌生まれ。マテオ・リッチの友人でもあった。

「回々館の記」章潢が一五七七年に完成させた類書(百科事典)「圖書編」(全百二十七巻。二百十一種の書から資料を採り、多くの図を挿入して記事の理解を助け、天地・自然・人事の全般を系統立てて要領よく述べたもの。明代史研究の重要史料とされており、西洋学の学習にも焦点を当てている)の中の「回回館」の記載であろう。「中國哲學書電子化計劃」で

『圖書編』卷五十一至卷五十二』の「回回館」が読めるが(非常に長い)、その冒頭に(漢字の一部を変更した)、

*

回回左西域地與天方國鄰其先即點德那國王謨罕慕德生而神靈臣服西城諸國職國尊爲別諸援爾華言天使也國中有佛經內十藏凡三千八百餘卷書筵策草精西洋諸國皆用之隋開皇中國人攝吟八轍阿的幹葛思始傳教入中璽本朝宣穗中國王遣人隨天方國朝貢由肅州入至今或三年五年一貢其地有城池宮室田園市肆大類江淮間寒暑應候民物蕃感亦有陰陽星應醫藥音樂諸採藝人俗重殺非同類殺不食不食豕肉其附近諸國如土魯番天方塞馮爾堪舊隸本館諄審此外如占城日本眞臘爪吐滿刺加諸國皆習回回教遇有進貢番文亦屬本館代譯

*

とある最後の部分が、熊楠の引くものと一致する。なお、「回々記」と熊楠は記すが、「々」は漢字ではなく、日本で勝手に作った繰り返し記号であって、中国では通じない(但し、近年、逆輸入しているとも言われる)。

「如占城日本眞臘瓜哇滿刺加諸國、皆習回教、遇有進貢番文、亦屬本館代譯」訓読しておく。

*

占城「やぶちゃん注…チャンパ王国。現在のベトナム中部に存在したチャム族の国家。」・日本・眞臘「やぶちゃん注…カンボジア。」・瓜哇「やぶちゃん注…ジャワ。」・滿刺加「やぶちゃん注…マラフカ」。マラツカ王国。マラツカ海峡に面したマレー半島とスマトラ半島に跨る地域にあったイスラム教国。」諸國、皆、回教を習ふ。進貢の番文有るに遇へば、亦、本館に屬して代譯せしむ。

*

「番文」「蠻(蕃)文」で異国人の言語で書かれた貢物の添え状。

「大英類典」英語の百科事典として最も古い歴史を持つ「エンサイクロペディア・ブリタニカ」(*Encyclopedia Britannica*)のこと。初版は一七六八年刊行。二〇一〇年度版を以って紙ベースの出版は終了しオンライン版のみとなった。

『四年前三月二日の「ノーツ・エンド・キールス」に、予一書を投じ、其出所を問し』『四年前』は明治四〇(一九〇七)年。「二日」は底本では「廿日」で初出も「廿日」であるが、「選集」は「二日」とし、「二日」が正しいので、特異的に訂した。[「Internet archive」の当該](#)

[「Notes and queries」を見られたい](#)。右ページの右の欄の一番最後の投稿である。この回の発行は三月二日である(当該ページの上部欄外ヘッダーのクレジットを見られたい)。

「允澎入唐記」室町時代の臨済僧東洋允澎(?〜享徳三(一四五四)年…絶海中津の法を嗣ぎ、京の天竜寺の住持となった。室町幕府の遣明(けんみん)正使として享徳二年に渡中し、任務を果たしたが、帰国の途中の享徳三年五月二十一日(二説に十二月二十八日)に病死した)に同行した笑雲瑞訢による「允澎入唐記」。国立国会図書館デジタルコレクションの

[「続史籍集覧」第一冊で活字化されている\(日録\)](#)。当該条はここ(右ページ八行目)。

「享徳二年十月十三日、南蠻瓜哇國人百餘人、在館求通信於日本」訓読すると、「享徳二年十月十三日、南蠻の瓜哇國の人百餘人、館に在りて、通信を日本に求む。」。

「爾前」「にぜん」。「に」は「爾」の呉音。それ以前。「じぜん」と呼んでも構わない。

「棚守房顯手記」野坂(棚守)房顯(明応四(一四九五)年〜天正一八(一五九〇)年…嚴島神社の神官で、嚴島神社大宮の宝蔵を管理する「棚守職」を世襲する野坂氏の出身であるが、職名から棚守房顯の名で知られる。大内義隆や毛利元就らの御師となり、嚴島神社再興に尽力した)が天正八(一五八〇)年三月に嫡男元行への置文(一族や子孫に対して現在及び将来に互って遵守すべきことを書き記した中世日本の文書。近世以後の遺言の原型とされる)様のものとして書いた「棚守房顯覚書」のこと。[サイト「宮島観光旅行まとめブログ」](#)

の「[柵守房顕覚書（資料）](#)」の「[柵守房顕覚書 139 野坂家家宝のこと](#)」に（そこに載る原文の漢字を恣意的に正字化し、句読点・記号を変更・追加した。読みは推定で私が補ったものである）。

*

一、當社家、奉行を存ずる上は、何と候ても、名を残し度き故、「ゆり若殿」の御父徳大寺公光きんみつ ひちりきの筆策、野間家斷絶に付き、房顯、もとめ、野間家の家書・目録とともに、寶藏に納めをく。又、横秋大臣の姫君、中將姫の繪掛け物、阿彌陀三尊梅檀は柵守の内儀寶藏へ納める。將又、天王寺の伶人蔦ノ坊、岡兵部小輔をかひやうぶしやうすけの父、蘭式部そのしきが、東儀因幡守、細々さいさい「やぶちゃん注」。

「懇ろに」の意でとっておく。」、下向あり。

然る處に、京一きやういちの琴なれば、「法華」と名づくるを、銀子五百文にもとめ下す。當社、末世の調法なり。佐々木の「綱切り」と傳ふ「あをの太刀」、野坂家の重代みぢりたり。神領一亂の砌、柵守が手に渡る。社家の事なれば、寶藏に納める。末代の事なり。

*

とある。『ゆり若殿』の御父徳大寺公光はウィキの「百合若大臣」によれば、百合若の父は「幸若舞」では『嵯峨朝の左大臣「公満（きんみつ）」とし、注に『説経正本には、父親が「四条公満」で、百合若の元服名は「公行（きんゆき）」と見える』とある。しかし徳大寺家・四条家にも「公光」「公満」の人物は見えない。

「鹽尻」江戸中期の随筆。天野信景ただかげ著。現在の通行本は門人堀田六林ほったくりんが考訂した百巻本で、原書は一千巻近くあったというされるが、多くは散逸した。大部であり、且つ、近世随筆の中では時代が早いことから、世に広く知られる。信景は名古屋藩士で、本書は、元禄（一六八八年～一七〇四年）から享保（一七一六年～一七三六年）にかけて、彼が諸書から記事を抜粋し、自身の意見を記したものの。対象事物は歴史・伝記・地誌・言語・文学・制度・宗教・芸能・自然・教育・風俗など、多岐に亘っており、挿絵もある。私は吉川弘文館随筆大成版（全六冊）を、兎部屋の書庫には置きようがないなど、買いそびれてしまい、持っていない。

「[帝國書院刊本、上巻六六四頁](#)」[国立国会図書館デジタルコレクションの画像のここ（右ページ上段中央から）で原本を視認出来る](#)。以下に電子化する。句読点・記号と、推定で濁点を打った。

*

○世にいふ百合若【或は大臣と稱す。】、豊後國船居に傳ふる故事也。百合若塚は船居の萬山萬壽興禪寺にあり。二十餘年前、揚宗和尚の時、塚を發く。石棺の内、立る白骨、一具あり。亦、古刀一柄、朽のこりし。領主も見られし。命して、元のごとく、埋みて祀られしとなん【此説、百合若は、淡海公の三男參議、宇合一には「やぶちゃん注」意味不明。】「島養」と

稱せし、此人なり、と。されども、據ある古書を見はべらず。】百合若の女を萬壽といふ。郷の「菖シヤウが池」に沈みし後、寺を建て、菖山萬壽寺と號す。百合若が奸臣別府太郎・同次郎が塚とて別府村にあり。高サ二、三尺とぞ。百合若あひせし鷹を「綠丸」といひし。州の鷹尾村より出しといふ。今、猶、よき鷹を産すといへり。凡、百合若の事、九國風土の説にして、昔し、其人有しと聞ゆ。されど、古記・實錄、所見なきにや。上野國妙義山に百合若の故をかたるも、いぶかし。浦島が事は、「丹後風土記」に見へしを、信濃國寢覺にもいふがごとし。

*

「紫の一本」(むらさきのひとつ)は江戸前期の歌学者戸田茂睡とだもすい(寛永六(一六二九)年(宝永三(一七〇六)年・駿府城内生まれ)の仮名草子。江戸地誌の体裁をとりながら、文学的な要素も強い。成立は天和年間(二六八一年(一六八四年)前後と推定されている。当該部は巻下の「橋」の「だいた橋」。国立国会図書館デジタルコレクションの「戸田茂睡全集」(大正四(一九一五)年国書刊行会刊)の当該箇所を視認して電子化する。一部に記号・読点を追加し、句点への変更も行った。一部に読みを推定で附した。編者注の割注も再現した(傍点は編者が注のために打ったものである)。

*

「だいた橋」。「だいたぼつち」が掛かけたる橋のよし、云傳いひふる。四ッ谷新町の先、笹塚の手前なり。肥後国八代領の内に「百合若塚」と云あり。塚の上に大木あり。所の者云、「百合若は賤いやし者なり。大臣と云は大人だいじんなり。『大太』とも云、大人おほひとにて、大力だいきありて、強弓つよゆみを引き、よく礮ひがてを打つ。今、『大太ぼつち』と云は、百合若の事、『ぼつち』とは「礮」の事なり」とぞ。一とせ、大風にて、右の塚の上の大木、たふれて、(塚【正本アリ】)くずれ崩たる中に、石の「からうと」「やぶちゃん注」・「屍櫃」(からうと(からうと))。「からひつ」の音変化。「からうど」とも呼ぶ。遺骨を納める棺。」有り。内を見るに、常の人の首四つ・五つ合せたる程の首、有り。不思議ふしぎを立て、見る内に、雪霜ゆきしものごとく、消失きえうせぬ。依これによりてレ之、大き成る卒塔婆そとばをたて、右の様子を書かき付て、塚の上に立たつる。其卒塔婆、今にありとぞ。百合若の事、筑紫人にて、玄海が島に於つ(正本ナシ)て鬼を平たいぐる事、百合若の舞に見えたり。然るに、奥州の「島の内」に「百合若島」と云ありて、「みどり丸」と云鷹いふの事まで、慥たしかにある島あり、とぞ。又、上州妙義山の道にも、「百合若の足跡」・「矢の跡」とてあり、此外にも、「大太ぼつち」が足跡・力業ちからわざの跡、爰こゝかしこにあり。

*

『四十一年四月十五日の東洋學藝雜誌、予の「ダイダラハウシの足跡」』。「南方熊楠 小兒と魔除(3)」で既出既注。その私の注と、そこにリンクさせたものを参照されたい。

「松屋筆記」江戸後期の国学者小山田与清ともしよの手になる辞書風隨筆。全百二十卷。文化一二（一八一五）年頃より弘化三（一八四六）年頃にかけての筆録で、諸書に見える語句を選び、寓目した書の一節を抄出しつつ、考証・解釈を加えたもの。その採録語句は約一万にも及び、国語学・国文学・有職故実・民俗などに関する著者の博識ぶりが窺える。現存は八十四卷。

[明治四一（一九〇八）年国書刊行会刊のこちらで視認出来る。](#) 電子化する。

*

（五）百合ユリワカ若 百合若草子に見えたる百合若大臣いまださだかならず豊後國志に大分君稚臣ヲカが事也といへり大分君稚臣は天武紀に見えたる勇士にて豊後大分郡の人也

*

熊楠はこれを「其名より臆測したる牽強らしく思はる」と退けているので、「豊後國志」や「大分君稚臣ヲカサミ」（「選集」はこれに『おおきだのきみわかみ』とルビするが、従わない）や「天武紀」は注しない。悪しからず。」

「やぶちゃん注…以下より、底本では、字下げの附記内容の二段を終えて、本文に戻って、新たに行最上部から始まっている。」

次に、古話の同似せるものの記録、東洋が西洋より古き二三の例を挙げんに、一五二五年頃初めて刊行され、殘缺本のみ現存せる英文`A Hundred Merry Tales` (ed. Hazlitt, London, 1881, pp. 123-124) に云く、「昔し倫敦に畫工有り、若き艶妻を持つが、用有て旅するに臨み、豫て其妻の心底を疑ひければ、其腹に羊を畫き、己が歸り來るまで、消失ぬ様注意せよと命じて出行きぬ、不在中に、未だ妻を持ざる好色の若き商人來り、畫工の妻を説き落し、屢ば室に入て之と姪す、會し畢て「やぶちゃん注…くわいしをはりて」。交接を終わって。」女の腹に復た羊を畫きける、夫在外一年許「やぶちゃん注…「ばかり」して歸り來り、妻と同床し、件の所を覽て大に驚き言く「やぶちゃん注…「いはく」。豫が汝の腹に畫けるは角無き羊なりしに、今此羊に二角あり、必定予の不在中不貞の行ひぞ有つらめと、是に於て妻夫に向ひ短く」と有て、下文缺けたり、友人「エー、コリングウッド、リー」氏、予の囑托に應じ、此話に似たる伊佛獨諸國の譚を聚め、報じ來りしを見るに、何れも十六世紀より古きは無し、然るに、西曆十三世紀に筆せる、無住の砂石集「やぶちゃん注…ママ。」七卷、六章に、此話有るのみならず、其前後の結構、歐州の諸話に比して一層詳細なり、惟ふに根本は小乗佛典より出しならん、予目下多忙にて、藏經を調査する暇無ければ、姑く「やぶちゃん注…「しばらく」。無住の所筆を引んに云ふ、「遠江國、池田の邊に庄官有りけり、彼妻極めたる嫉妬心の者にて、男を取詰めて、あからさまにも差出さず、所の地頭代、鎌倉より上りて、池

田の宿にて遊けるに、見參の爲宿へ行かんとするを、例の許さず云々、如何見參せざらん、許せと言ふに、去ば印を附ん迎、陰れたる所に、すり粉を塗りてけり、扱宿へ行ぬ、地頭皆子細知て、いみじく女房に許されておはしたり、遊女呼で遊で給へと云に、人にも似ぬ者にて、六かしく候、しかも符を付けられて候と云て、云々と語りければ、冠者原に見せて、本の如く塗可しとて、遊で後、本の様違へず、摺粉を塗て家へ歸りぬ、妻云々、摺粉をこそ引けて嘗て見て、さればこそしてけり、我摺粉には鹽を加へたるに、是は鹽が無きとて、引伏せて縛りけり、心深き餘りに疎ましく覺えて、頓て打ち捨て鎌倉へ下りけり、近き事也、舊き物語りに、或男他行の時、間男持る妻を符附ん迎、隠れたる所に牛を描てけり、去程に、まめ男の來るに、斯る事なん有と語ければ、我も繪はかけば描くべしとて、去ば能々まみて、元の如くも描で「やぶちゃん注：「ゑがかで。」」、實の男は臥る牛を描るに、間男は立る牛を描きてけり、扱夫歸で見て、去ばこそ、間男の所爲にこそ、我描る牛は臥る牛なるに、是は立る牛なりと叱りければ、哀れやみ給へ、臥る牛は一生臥るか云ければ、さもあらん迎許しつ、男の心は淺く大様なる習ひにや、嗚呼がましき方も有れども、情量の淺き方は、罪も淺くや、池田の女人には事の外似ざりけり」委細は、予の「Man who painted the Lamb upon his Wife's Body,`Vragen en Mededeelingen, Arnhem, I ser., i, pp. 261-262, 1910. に載せたり、又三年前刊行 G.L.Gomme, `Folklore as an Historical Science,` p.67 Seqq. に、蘇格蘭「やぶちゃん注：「スコットランド」」の古語出づ、云く、富る老翁、多くの子成長したるに畑地を分與たり「やぶちゃん注：「わけあたへたり。」」、老妻死しければ財産を悉諸子に分ち、自ら巡廻して諸子の家に客たり、諸子父を倦厭し、之を除き去んと謀る、老翁大に悲しみ、道傍に哭くを見て、舊友一人問て其故を知り、伴て自家に置き、黄金一鉢を授け、云々せよと教ゆ、翁其言に従ひ、諸子寺へ詣で、孫共が留て塚上に遊べる所へ往き、日向で大石上に黄金を擴げ出し、呟て言く、「噫「やぶちゃん注：「ああ。」黄金、汝は久く蓄へられて、黴が生へさうだ、どりや日に乾してやらう」と、孫共塚に上り之を窺ひ、走り來て問ふ、「ぢいさま何ぢや」と、翁應ふらく、「お前等の構ふ事で無い、こらこら觸れちあいけねー」と、言終りて黄金を大袋に盛り、舊友の許へ去る、諸子寺より還て、孫の報告に接し、何とか老翁の金を得んと、争て機嫌を取る事甚だ勉む、老翁又友の訓えに由て、小作りな頑丈な箱を造り、常に隨身して歩く、皆々その何たるやを尋ぬる毎に翁唯「此箱を開く時が來たら自ら知れる」と答るのみ、扱兒孫の追従一方ならぬ中に、老翁没しければ、一族争ひ飭りて「やぶちゃん注：「かざりて。」」、善美を盡せる「やぶちゃん注：底本は「儘せる」であるが、[初出](#)で訂した。」葬式済まして後、相會して其箱を開き見れば、茶碗の破片と、石數塊と、長柄の槌有るのみ、一同宛込み大外れ乍ら、槌の頭の銘を讀むに、

この槌は、子に分け盡し、鵜の毛だに、

身に添えぬ馬鹿の、頭をぞ打つ、

「ゴム」氏いわく、この話馬鹿氣たりと雖も、次の史實を包存せり、(一) 古え諸國に、地面持ちの子供長ずる時、各に地面を分與し、子供別れ住み親は僅に一小地片を自有する風有し事、(二) 父老ゆれば、財産を擧て子に譲る風有し事、(三) 昔し此話の本國(蘇格蘭)には、同源の諸家一團に群立し、近傍の畑地を、諸家通じて共に耕せる風有し故に、老翁産を子供に分ち悉し「やぶちゃん注：「つくし」」、巡廻して諸子に客たりしと言ふ也、(四) 古え歐洲の或部に、人老れば子に打殺さる俗ありし等是也と、熊楠按ずるに、史記陸賈傳に、呂后擅政「やぶちゃん注：「せんせい」。ほしいまま恣に政治を執ること。」の際、陸生、自度不能爭之、乃病免家居、以好畤田地善、可以家焉、有五男、廼出所使越得囊中裝、賣千金、分其子、子二百金、令爲生産、陸生常安車驢馬、從歌舞鼓琴瑟侍者十人、寶劔直百金、謂其子曰、與汝約、過汝、汝給吾人馬酒食、極欲十日而更、所死家、得寶劔車騎侍從者、一歲中、往來過他客、率不過再三過、數見不鮮、無久恩公爲也、予は是れ史實なるか小説なるかを知らず、又決して、俄に、蘇格蘭の古話が、支那の陸賈傳に基くと斷ぜずと雖も、子が成長して親を厭ふの情狀を敘せる此類の記録は、東洋が西洋より早く、而して老父を槌殺せし風習の痕跡だに留めざる支那の徳化が、廻に「やぶちゃん注：「はるかに」。」北歐より古く進めるを認む(予の「The Neglected Old Father: Chinese Parallel, Notes and Queries, Aug. 20, 1910, p.145 に出)又伊國の大文豪「ボツカチオ」の「デカメロン」、第七日第九譚に、淫婦「リヂア」、老夫の氣力乏しきを嘆ち「やぶちゃん注：「かこち」」、美少年「ピロ」に懸想し、幽情勃動、病んで死せんとするの狀を通じけるに、男三難題を出し、夫人能く悉く之を成就せば、戀を叶ふべしと答ふ、其第三の難題は、夫人須く其夫の齒を抜き、吾に贈るべしとあり、是於、「リヂア」計て「やぶちゃん注：「はかりて」」、兩侍童に訓ゆらく「やぶちゃん注：「おしゆらく」」、主翁汝等の口臭を忌む、汝等給侍する毎に、顔を横向けよと、兩童然くせしかば夫之を怪しむ、夫人進で説て言く、君の齒朽ち臭甚き故也と、輒ち爲に其齒を抜き、情人に遣る、「やぶちゃん注：初出で読点を補った。」「クラウストン」氏此類の譚を集めしに、歐洲に十二世紀より前に之を記せし者無し'(W.A.Clouston, 'Popular Tales and Fictions,' 1887, vol.ii, p.444 Seqq.; A. C. Lee, 'The Decameron, its Sources and Analogues,' 1909, p.231 Seqq.) かるに、予、韓非子(西曆紀元前三世紀の作)卷十に、是に似たる話有るを見出せり、云く、荆王所愛妾、有鄭袖者、荆王新得美女、鄭袖因教之曰、王甚喜人之掩口也、爲近王、必掩口、美女入見近王、因掩口、王問其故、鄭袖曰、此固言、惡王之臭、及王與鄭袖美女三人坐、袖因先誡御者曰、王適有言、必亟「やぶちゃん注：底本は「丞」であるが、「韓非子」原本で訂した。また、次にくる読点位置も不全なので訂した。」聽從王言、美女前近王、甚數掩口、王勃然怒曰、劓之、御因揄刀而劓美人、因以之を譯し、Notes and Queries, Dec.24, 1904, p.505

に掲げしに、「リー」氏評して、是れ此類の諸譚中最も古き者たり、古話の學する者、一齊に南方氏の發見を感謝すべしと言れたるは、不慮の過賞予慙汗三斗たらざるを得んや (A. C. Lee, 'The Envid Favorite,' N. & Q., Jan. 28, 1905, pp.71-73 を見よ)'

「やぶちゃん注：「一五二五年」本邦では大永五年で戦国時代真っ只中。

「A Hundred Merry Tales」(ed. Hazlitt, London, 1881, pp. 123-124)」著者はイギリスの弁護士・書誌学者・作家ウィリアム・カルー・ハズリット (William Carew Hazlitt 一八三四年～一九一三年)。底本ではページが「pp. 23-4」となっているが、初出と「選集」で訂した。それらしき原本をネットで見つけたが、しかし、孰れのページにもそれらしい内容が書かれていない。不審。

「エー、コリングウッド、リー」[「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜 \(20：蟾蜍\)」](#)に「A. C. Lee, 'The Decameron its Sources and Analogues, 1909, p.139」(「デカメロンの原拠と類譚」か)と出た著者のアルフレッド・コリングウッド・リー (Alfred Collingwood Lee) であろう(詳細事績未詳)。

「砂石集」「沙石集」(しゃせきしゅう)が正しい。鎌倉時代の仏教説話集。全十巻。無住一円著。弘安六(一二八三)年成立(原本はカタカナ漢字交り)。当該話は、第七の「六嫉妬の心無き人の事」。但し、これは複数話から成るオムニバス構成で、その中の二篇である。所持する一九四三年岩波文庫刊筑土鈴寛校訂本から引く。句読点を追加し、段落を成形した。底本は一部が伏字になっているので(呆れかえるほど馬鹿々々しい戦時下の自主規制コードの仕儀である)、所持する岩波の古典文学大系本の「拾遺」で補った。話の変わる箇所に「+」を挿入しておいた。

*

遠江國、池田の邊ほとりに、庄官ありけり。かの妻、きはめたる嫉妬心の者にて、男をとりつめて「やぶちゃん注：異常に思い入れて。」、あからさまにもさし出ださず。

所の地頭代、鎌倉より上りて、池田の宿にて遊びけるに、

「見參のため、宿へ行かん。」

とするを、例の「やぶちゃん注：「例の通り」の意。」、ゆるさず。

「地頭代、知音なりければ、いかが見參せざらん。許せ。」

と言ふに、

「さらば、しるしをつけん。」

と、かくれたる所にすり粉こなを塗りてけり。

さて、宿へゆきぬ。地頭、みな、子細知りて、

「いみじく女房に許されておはしたり。遊女呼びて、遊び給へ。」

と言ふに、

「人にも似ぬ者にて、むつかしく候ふ。しかも、符しるし付けられて候ふ。」
と言うて、

「しかじか。」

と語りければ、

「冠者ばらに見せて、本のごとく、塗るべし。」

とて、遊びて後、もとの様にたがへず摺粉すりを塗りて、家へ歸りぬ。

妻、

「いでいで、見ん。」

とて、摺粉をこそげて、なめてみて、

「さればこそ。してけり。わが摺粉には、塩をくはへたるに、これは、鹽が、なき。」
とて、ひきふせてしぼりけり。

心深さ、あまりにうとましく覺えて、頓やがてうち捨てて、鎌倉へ下りにけり。
近きことなり。

+

舊き物語に、ある男、他行の時、まをとこ持てる妻を、

「しるしつけん。」

とて、かくれたる所に、牛をかきてけり。

さるほどに、まめ男の來たるに、

「かかる事なん、あり。」

と語りければ、

「われも繪はかけば、かくべし。」とて、さらば、能々「やぶちゃん注…よくよく。」見て、
もとのごとくもかかで、實「やぶちゃん注…まこと。」の男は、ふせる牛をかけるに、ま
をとこは、立てる牛をかきてけり。

さて、夫、歸りて、見て、

「さればこそ、まをとこの所爲にこそ。わがかける牛はふせる牛なるに、これは、たてる牛
なり。」

としかりければ、

「あはれ、やみ給へ。ふせる牛は、一生、ふせるか。」
と言ひければ、

「さもあるらん。」

とて、ゆるしつ。

男の心は、あさく、おほやうなるならひにや。をこがましきかたもあれども、情量のあさきかたは、つみもあさくや。

池田の女人には、事のほかに、似ざりけり。

*

この「すり粉」(摺り粉)は、米を搗り鉢で擦り碎いて粉にしたもので、湯で溶いて乳児に母乳の代わりとして与えた。後の江戸時代には火にかけて汁飴しるあめを加えて甘味をつけて吸わせたりもした。「人にも似ぬ者にて」とは妻の妬心が尋常でないことを言うものであろう。「いでいで」は感動詞。「さあ! さあ!」と、異様にせかしているのである。「ひきふせてしぼりけり」となると、妬心の鬼と言うよりは、サディズムの性向さえ窺える。「情量」は仏教用語で、「凡夫に於ける妄想的な不全の分別」を指す。

「惟ふに根本は小乗佛典より出しならん」私は忙しくはないが、熊楠の代わりに、この原拠を探すために仏典を引つ繰り返す気は毛頭ない。悪しからず。

「予の`Man who painted the Lamb upon his Wife's Body,` Vragen en Mededeelingen, Arnhem, I ser., i, pp. 261-262, 1910.」不詳。

「G.L.Gomme, `Folklore as an Historical Science,` p.67 Seqq.」イギリスを代表する民俗学者ジョージ・ローレンス・ゴム (George Laurence Gomme 一八五三年〜一九一六年)の一九〇八年の著作「歴史科学としての民間伝承」。ずっと後の版だが、[「Internet archive」の原本のこちら](#)から読める。

「史記陸賈傳に……」「陸賈」(りくか 生没年未詳)は前漢初期の学者・政治家。楚の人。高祖劉邦に仕え、天下統一に貢献した。著に秦漢の興亡を述べた「新語」十二編がある。自然流で訓読を試みる。

*

陸生、自ら之れと争ふ能はざるを度りて、乃ち、病ひもて、免ぜられて、家居す。以く、

「好時こうし「やぶちゃん注」旧県名。現在の咸陽市乾陽洪鎮好時村一帯。」の田地、善ければ、以つて家とすべし。」と。

五男、有り、廼すなはち、越えつに使ひして得る所の囊たくちゆう中の装しやうを出だし「やぶちゃん注」：「囊」は中央に口があって両端に物を入れて担ぐ袋のこと。」「千金に賣りて、其の子に分かつこと、子ごとに二百金、生産を爲さしむ。陸生、常に安車・驢馬うもて、歌舞して琴瑟うを鼓つ侍者十人を従へ、寶劔あたいは直あたひ百金たり。其の子に謂ひて曰はく、

「汝なんぢらと約す。汝に過たらば、汝、吾が人馬に酒食を給せ。欲を極むること、十日にして、

更へん。死する所の家は寶劍・車騎・侍従の者を得よ。一歳いちさいの中、往來して他に過りて客たらんとせば、率ね、再三、過ぐるに過ぎざるべし。數見かずみえんは、鮮せんならず。久しく、公を慰なぐさすことを爲すは無からん。」

*

「予の`The Neglected Old Father: Chinese Parallel,` Notes and Queries, Aug. 20, 1910, p.145 に出」[「Internet archive」の原本の](#)このページにかけてがそれ。かなり長いが、幸いなことに、前に出たスロットランドの昔話も採録されているので、以下に電子化する。

*

THE NEGLECTED OLD FATHER : CHINESE PARALLEL. — A Gaelic story is quoted as follows from J. F. Campbell in Mr. Gomme's `Folk-lore as an Historical Science,` London, n.d., pp. 67-8 :

"There was a man at some time or other who was well off, and had many children. When the family grew up the man gave a well-stocked farm to each of his children. When the man was old his wife died, and he divided all that he had amongst his children, and lived with them, turn about, in their houses. The sons got tired of him and ungrateful, and tried to get rid of him when he came to stay with them. At last an old friend found him sitting tearful by the wayside, and, learning the cause of his distress, took him home; there he gave him a bowl of gold and a lesson which the old man learned and acted. When all the ungrateful sons and daughters had gone to a preaching, the old man went to a green knoll where his grandchildren were at play, and, pretending to hide, he turned up a flat hearthstone in an old stance [= standing-place], and went out of sight. He spread out his gold on a big stone in the sunlight, and he muttered, `Ye are mouldy, ye are hoary, ye will be better for the sun.` The grandchildren came sneaking over the knoll, and when they had seen and heard all that they were intended to see and hear, they came running up with, `Grandfather, what have you got there?` `That which concerns you not ; touch it not,` said the grandfather, and he swept his gold into a bag and took it home to his old friend. The grandchildren told what they had seen, and henceforth the children strove who should be kindest to the old grandfather. Still acting on the counsel of his sagacious old chum, he got a stout little black chest made, and carried it always with him. When any one questioned him as to its contents his answer was, `That will be known when the chest is opened.` When he died he was buried with great honour and ceremony, and the chest was opened by the expectant heirs. In it were found a broken ; potsherds and bits of slate, and a long-handled white wooden mallet with this legend on its head :

Here is the fair mall

To give a knock on the skull

To the man who keeps no gear for himself,

But gives all to his bairn."

Whether or not it has one and the same origin with this Scottish tale, a Chinese anecdote of a similar stamp is related, with all his characteristic eagerness, by Sze-ma Tsien, the greatest historian China has ever produced. It occurs in the `Life of Lu Kia` in his `Shi-ki`, written c. B.C. 97. It tells us how in the year 196 B.C. the Emperor Hautsu sent Lu Kia, the great literate and diplomat, to Tchao To, the self-made monarch of Nang-yue, in order to subdue him without the use of arms (for the latter's life see Gamier, `Voyage d'Exploration en Indo-Chine`, Paris, 1873, torn. i. p. 469). The eloquent Lu Kia completely brought over Tchao To, so that the latter presented the former on his farewell with a bag containing valuables worth a thousand pieces of gold, to which he added another thousand for viaticum.

After the Emperor Hiao-hui succeeded his father Hau-tsu (B.C. 194), the Dowager-Empress Lu was hankering to make kings of her own kindred, quite contrary to the will of her deceased husband. Well knowing his incompetence to stop this, Lu Kia pretended to be unwell, and retired to Hao-chi, there to live by keeping excellent farms.

"As he had five sons," the narrative continues, "he took out of the bag the valuables Tchao-To had given him, and sold them for one thousand pieces of gold. These he divided amongst his sons, telling each to thrive with the fund of two hundred pieces. Lu Kia procured for himself a comfortable carriage drawn by four horses, ten attendants, all skilful in music and dancing, and a sword which cost him one hundred gold pieces. Then he spoke to his sons thus: `Now I covenant with you that whenever I come to any one of you, you shall supply me, my attendants, and my horses, with enough of food and drink, and I will go off after enjoying them for ten consecutive days. Should I happen to die in the house of any one of you, my sword, my carriage with horses, and my attendants, will all fall into his possession. But I will not visit any one of you more than twice or thrice a year, because to call on you more frequently would make you entertain me with less will, whilst a prolonged stay in one and the same house would inevitably be followed by your getting tired of me.`He died after enjoying longevity."

KUMAGUSU MINAKATA.

Tanabe, Kii, Japan.

*

機械翻訳でも、本文の内容と照らして十二分に理解出来る。

『「ボツカチオ」の「デカメロン」、第七日第九譚』多量の伏字があるが、[国立国会図書館デジタルコレクションの河原万吉等訳「デカメロン」\(昭和二\(一九二七\)年潮文閣刊\)](#)のここから読める。

『「クラウストン」氏此類の譚を集めしに、歐州に十二世紀より前に之を記せし者無し、(W. A. Clouston, 'Popular Tales and Fictions,' 1887, vol.ii, p.444 Seqq; A. C. Lee, 'The Decameron, its Sources and Analogues,' 1909, p.231 Seqq.)』イギリスの民俗学者ウィリアム・アレキサンダー・クラウストン(William Alexander Clouston 一八四三年～一八九六年)。[「Internet archive」のこちらから原本当該部が読める。](#)

「韓非子(西暦紀元前三世紀の作)卷十に、是に似たる話有るを見出せり、云く……」自然流で訓読を試みる。

*

荆王が愛する所の妾に、鄭袖なる者、有り。荆王、新たに美女を得たり。鄭袖、因りて之れに教へて曰はく、

「王、甚だ人の口を掩ふを口喜ぶなり。爲し、王に近づかば、必ず、口を掩へ。」と。

美女、入りて見え、王に近づくに、因りて、口を掩ふ。王、其の故を問ふ。鄭袖、曰はく、「此れ、固より言へらく、王の臭きを惡む。」

と。王、鄭袖と美女と三人坐するに及び、袖、因りて、先づ、御者「やぶちゃん注」侍従。を誡めて曰はく、

「王、適ま言有らば、必ず亟かに王が言に聽從せよ。」

と。美女、前みて王に近づくに、甚だ、數ば、口を掩ふ。

王、勃然として怒りて曰はく、

「之れ、劓るべし。」

と。

御、因りて刀を揃きて、美人を劓る。

「Notes and Queries, Dec.24, 1904, p. 505 に掲げ」[「Internet archive」の原本のこの右ページ](#)末から次のページで当該部が読める。

『「リー」氏評して、是れ此類の諸譚中最も古き者たり、古話の學する者、一齊に南方氏の發見を感謝すべしと言れたるは、不慮の過賞予慙汗三斗たらざるを得んや (A. C. Lee, 'The Envid Favorite,' N. & Q., Jan. 28, 1905, pp.71-73 を見よ)』「リー氏」とは「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜 (20 : 蟾蜍)」や「A. C. Lee, 'The Decameron its Sources and Analogues, 1909, p.139」(「デカメロンの原拠と類譚」か。著者がアルフレッド・コーリングウッド・リー(Alfred

Collingwood Lee) であることしか判らない (生没年も検索で出てこない) と引いた人物。

[「Internet archive」の原本のここから](#)。確かに冒頭で、

*

ALL students of folk-lore will be grateful to MR. KUMAGUSU MINAKATA for furnishing what is apparently the earliest version of the incident which may be termed `The Foul Breath` occurring in the above well-known story. The following references to various Eastern and Western sources I give from a collection of notes made for a work on the subject of the origin and diffusion of the tales in Boccaccio's `Decameron`, which I hope may some day see the light, and which may perhaps be useful to the readers of `N. & Q.`

*

と賛辞を掲げてある。』

晋朝に成る三輔故事には「やぶちゃん注：底本の以下の引用は、原影印本の当該部（『中國哲學書電子化計劃』）を見ると、ひどい不全があるので、特異的に訂した。これは編集時のミスで、初出はほぼ問題がない。』漢の衛太子獄鼻、太子來省疾、至甘泉宮、江充告太子、勿入、陛下有詔、惡太子獄鼻、當呂紙蔽其鼻、充語武帝曰、太子不欲聞天子膿臭、故蔽鼻、武帝怒太子、太子走還り遂に殺されし由言り、序でに述ぶ、「デカメロン」、第七日第六譚、武士の妻其夫の不在に、若き男と密會する處へ、平素此女を慕へる荒武者來り逼る、女已むを得ず、男を牀下に隠し、荒武者を引入る、俄かに其夫歸り來り、荒武者の馬を維ぎ「やぶちゃん注：「つなぎ」。」たるを見、大に怪む、妻頓智もて荒武者に訓え「やぶちゃん注：「をしへ」の誤り。「え」は熊楠の癖。」、拔刀して、「必ず何處で「やぶちゃん注：「いづこかで」。」思ひ知せん」と叫び乍ら出去しめ「やぶちゃん注：「いでさらしめ」。」、夫入り來るに先ち「やぶちゃん注：「さきだち」。」寢室に退き、密夫に聞ゆる様、高聲に夫に語りけるは、彼荒武者狂氣して、見知らぬ若き男を追ひ、其男忽ち此室に逃籠れりと、夫則ち彼男を搜し出し、飲食させ、その宅え送り届けたりと、此話に多少似たる者、亦韓非子卷十に出づ、曰く「やぶちゃん注：底本の以下の引用は、原影印本の当該部（『中國哲學書電子化計劃』）を見ると**全があるので、特異的に訂した**。」、燕人李季好遠出、其妻私有通於士、季突至、士在内中、妻患之、其室婦曰、令公子裸而解髮直出門、吾屬佯不見也、於是、公子從其計、疾走出門、季曰、是何人也、家室皆曰無有、季曰、吾見鬼乎、婦人曰然、爲之奈何、曰取五姓之矢浴之、季曰諾、乃浴以矢、(A. C. Lee, op. cit., p.184. 武士幽靈の體にて夫を給き「やぶちゃん注：「あざむき」。」妻に謝罪する譚參看すべし)」、

「やぶちゃん注：「三輔故事」「さんぽこじ」。漢の趙岐らの撰になる首都長安の地誌とその

関連故事を集めたもの。我流で訓読しておく。原文では最後に「」とあるのでそれを添えた。

＊

漢の衛太子は嶽鼻えくだいしたり。來たりて、疾みひを省みひて、甘泉宮に至る。江充、太子に告げて、「入なかる勿なれ。陛下より詔せうあり。『太子が嶽鼻を惡にくむ』と。當まさに紙を目もつて其の鼻を蔽おほふべし。」と。

充、武帝に語りて曰はく、

「太子、天子の膿臭なかを聞かぐを欲せず。故に鼻を蔽おほふ。」

と。武帝、太子を怒り、太子、走り還れり。

＊

「衛太子」武帝の皇后衛子夫の子ということであろうが、この佞臣江充（？）紀元前九一年…詳しくは彼のウイキを参照）と対立した武帝の長男で太子であった戾太子劉拠（紀元前一二八年）紀元前九一年）は逆に「巫蠱の禍」の乱で江充を斬殺している（ウイキの「劉拠」を参照。但し、乱の直後に自身も誤解した武帝により自害している）。熊楠の「太子走還り遂に殺されし由言り」というのは、原本の略述部（改行して、衛太子の死を記してある）を勝手にそう解釈してしまったものと思われる。

「韓非子卷十に出づ、曰く……」我流で訓読しておく。

＊

燕人李季、遠出を好む。其の妻、士に私ひそに士に通ずる有り。突にはに至る。士、内への中にあり、妻。之れを患うれふ。其の室婦「やぶちゃん注…下女。」曰はく、

「公子をして、裸となして、髪を解き、直ちに門より出でしめよ。吾が屬ともがら「やぶちゃん注…私達下女らは。」、『見えず』と伴はづらん。」と。

是に於いて、公子、其の計に従ひ、疾走して門を出づ。

季曰はく、

「是れ、何人ぞや。」

と。家室、皆、曰はく、

「有る無し。」「やぶちゃん注…「何も見えませんが？」。」

と、季曰はく、

「吾、鬼きを見たるか。」

と。婦人曰はく、

「然しかり。」

と。

「之れを爲すこと、奈何。」「やぶちゃん注…「その厄を祓うにはどうすればよろう?。」」
と。曰はく、

「五牲の矢をとってこれに浴せよ。」「やぶちゃん注…「五牲」牛・羊・豚・犬・鶏。「矢」は
「糞・屎」の意。」

と。季曰はく、

「諾。」

と。乃ち、浴するに、矢を以つてす。

*

原本では流石に動物の糞尿を浴びるのが気が引けたか、最後に「一日浴以蘭湯。」(一つに曰ふ、「蘭の湯を以つて浴す」と。)とあるのが面白い。

「A. C. Lee, op. cit., p.184. 武士幽霊の體にて夫を給き、妻に謝罪する譚參看すべし」当該ページには見当たらない。」

「シンダレラ物語」は、何人も知らぬ者なき通り、歐米で最も盛んに行なわれる仙姑傳(フエヤリーテイル)也、「シンダレラ」、繼母に惡まれ、常に灰中に坐し、厮役厨務「やぶちゃん注…「しえきちゆうむ」」に苦しめられ、生活全く、異母妹の盛飾遊食するに反せり、一旦仙姑の助けにより、貴公子に見初められしが、公子之を執へんとする毎に、駛く「やぶちゃん注…「はやく」」。去て影を留めず、然るに或夕べ、例のごとく公子眼前に舞踏濟み、遁れ去んとして、仙姑が呉たる履を落す、公子之を拾ひ、衆女を試るに、「シンダレラ」の足のみ之に合ふ、公子因て意中の人を認め、之を娶る、此譚西洋に弘く行はるゝ丈け、其作り替えも多きは、例せば C. Pedroso, 'Portuguese Folk-Tales', London, 1882. 葡萄牙の古話三十を載たる中、「シンダレラ物語」に屬する者、三つ迄有るにて知るべし、偕「やぶちゃん注…「さて」」。予廿三年前在米の間、西陽雜俎續集卷一に、支那の「シンダレラ」物語有るを見出し、備忘録に記し置き其後土宜法龍師杯「やぶちゃん注…底本「杯」と誤字する。特定の訂した。」に報ぜし事有り、英國の俚俗學會、曾て廣く諸國に存する「シンダレラ」物語の諸種を集め、出版せし一冊あり、予在外中、好機會多かりしも、多事なりし爲め、遂に之を閲せざりしぞ遺憾なる、近日倫敦の學友を頼み、右の書に支那のシンダレラ譚有りやと調べ貰ひたるに、全く無しとの返事也、然し其人斯る事に趣味を持ざれば、實際は知れず、兎に角、自分折角、久しく取つて置き物を、其儘埋め去る事の惜しまるれば、爰に其文を載す、縦ひ既に學者間に知悉されし事なりとも、此物語を、歐州特有の物と思ひ居る人々の、耳目を廣むるの少益有りなんか、云く「やぶちゃん注…以下の底本の漢字表記には疑義があるので、[「中國哲學書電子化計劃」](#)の影印本画像を視認して一部を特異的に訂した。読点も不

審な箇所があるので訂した。」、南人相傳、秦漢前有洞主吳氏、土人呼爲吳洞、娶兩妻、一妻卒、有女名葉限、少惠善鉤金、父愛之、未歲父卒、爲後母所苦、常令樵險汲深、時嘗得一鱗、二寸餘、賴伯鬻金目、遂潛養於盆水中、日長、易數器、大不能受、乃投於後池中、女所得餘食、輒沉以食之、女至池、魚必露首枕岸、他人至不復出。其母知之、每伺之、魚未嘗見也、因詐女曰、爾無勞乎、吾爲爾新其襦、乃易其弊衣、後令汲於他泉、計里數百也、母徐衣其女衣、袖利刃行向池、呼魚、魚卽出首、因斫殺之、魚已長丈餘、膳其肉、味倍常魚、藏其骨於鬱棲之下、逾日、女至向池、不復見魚矣、乃哭於野、忽有人被髮簷衣、自天而降、慰女曰、爾無哭、爾母殺爾魚矣、骨在糞下、爾歸、可取魚骨藏於室。所須第祈之、當隨爾也、女用其言、金璣衣食隨欲而具、及洞節、母往、令女守庭果、女伺母行遠、亦往、衣翠紡上衣、躡金履、母所生女認之、謂母曰、此甚似姊也、母亦疑之、女覺、遽反、遂遺一隻履、爲洞人所得、母歸、但見女抱庭樹眠、亦不之慮、其洞隣海島、島中有國名陀汗、兵強、王數十島、水界數千里、洞人遂貨其履於陀汗國主得之、命其左右履之、足小者履減一寸、乃令一國婦人履之、竟無一稱者、其輕如毛、履石無聲、陀汗王意其洞人以非道得之、遂禁錮而拷掠之、竟不知所從來、乃以是履棄之於道旁、卽遍歷人家捕之、若有女履者、捕之以告、陀汗王怪之、乃搜其室、得葉限、令履之而信、葉限因衣翠紡衣、躡履而進、色若天人也、始具事於王、載魚骨與葉限俱還國、其母及女卽爲飛石擊死、洞人哀之、埋於石坑、命曰懊女塚、洞人以爲奠祿祀、求女必應、陀汗王至國、以葉限爲上婦、一年、王貪求、祈於魚骨、寶玉無限、逾年、不復應。王乃葬魚骨於海岸、用珠百斛藏之、以金爲際、至徵卒叛時、將發以贍軍、一夕、爲海潮所淪、成式舊家人李士元聽說、士元本邕州洞中人、多記得南中怪事。

「やぶちゃん注：『シンデレラ物語』平凡社『世界大百科事典』の「シンデレラ(Cinderella)」を引くが、意想外に記載が短い(コンマを読点に代えた)。『世界的に分布の広い継子話の女主人公の英語名。話の起源はオリエントと考えられている。フランスではシャルル・ペローが《昔々の物語ならびに教訓》(一六九七年)『に〈サンドリヨン〉の名で、口伝えの再話作品をのせ、ドイツでは《グリム童話集》二十一『番に〈灰かぶり〉がある。口伝えの類話にも多様な変化と組合せがあるが、ほぼ次のような骨格をもつと考えられる。継娘が継母とその実子に虐待されるが、親切な動物が食物や贈物をくれる。実子がそれを知り、継母が動物を殺す。シンデレラがその死体を埋葬すると、墓に上等な服がおいてある。王子が祝宴を開くことになると、継母は難題を与えてシンデレラを行かせまいとする。動物たちの援助で難題を片づけ、墓の上等な服を着てシンデレラが祝宴に行くと、王子は美しさに打たれて娘をひきとめるが』、一『度までは逃げられ』、三『度目に娘の靴だけを手に入れる。王子はその靴に合う足の娘を探し、ついにシンデレラを発見して結婚する。この話は他の継子話、《一つ目、二つ目、三つ目》や《千びき皮》などと混じりあいながら、『多様な変化をして

伝承されている。動物の墓は、しばしば実母の墓ともいわれ、そこに木が生えて美しい着物を出してくれるという。死霊が植物に化成するという古い宗教観念の反映と考えられる。日本の《米福糠福》もこの系統の話と考えられるし、《姥皮》もこの話の後半部分と関係がある』。[ウィキの「シンデレラ」](#)も熊楠の起源説探求としては引くに値しない。因みの英文表記の「Cinderella」とは「Cinder」（灰）に対象が女性や子供を表わす際の接尾語「ella」が附された「灰だらけの汚い娘」という卑称の綽名である。

「仙姑傳（フェアリーテイル）」fairy tale。原義は「妖精（精霊）についての物語」であるが、転じて「御伽話」「信じられないほど美しい話」の意。形容詞としても用いられる。

「廝役」召使い。

「C. Pedroso」ポルトガルの歴史家・民俗学者ゾフィモ・コンシグリエリ・ペデルゾ (Zófimo Consiglieri Pedroso 一八五一年～一九二〇年)。[当該英訳書は「Internet archive」のこちらで読める。](#)

「西陽雜俎」（ゆうようざっそ：現代仮名遣）晩唐の官僚文人段成式（八〇三年～八六三年）撰の荒唐無稽な怪異記事を蒐集した膨大な随筆。八六〇年頃の成立。本文は後掲する。

「土宜法龍」（どきほうりゅう 安政元（一八五四）年～大正一二（一九二三）年）真言僧で真言宗高野派管長。名古屋生まれ。本姓は白井。四歳の時に伯母の貞月尼を通じて出家し、「法龍」と称した。明治二（一八六九）年に高野山に登って、真言・天台などの教義を学び、仏教教学の研究に努めた。明治二六（一八九三）年、アメリカのシカゴで開催された「万国宗教会議」に日本仏教の代表の一人として参加した。その会議終了後、ヨーロッパに渡り、パリでは「ギメ博物館」仏教部の要請を受けて五ヶ月間、滞在しており、また、ロンドンでは、まさに滞欧中であつた南方熊楠と出会い、互いに意気投合して、パリ滞在中にもロンドンの南方と書簡を交わすようになり、西域・チベットへの仏教探訪の旅を語り合つてもいる。また、南方が紀伊に帰つてからも、文通が頻繁に行われ、南方の宗教観、特に曼荼羅論・宇宙論に大きな影響を及ぼしている（この往復書簡は甚だ面白い）。明治三十九年に仁和寺門跡御室派管長、大正九（一九二〇）年に高野派管長となり、真言宗各派連合総裁・高野山大学総理などを兼任した。

「俚俗學會」民俗学会。

「西陽雜俎續集卷一」の「しだくこう支諾皋上」の最初の方に出る。所持する「東洋文庫」（一九九四年刊）の今井与志雄氏の訳文を参考に訓読を試みる。今まで言っていないが、平凡社「選集」版は勝手に訓読したものが載るが、これが現代仮名遣で、しかも訓読者が漢籍に詳しい人物でないようで、甚だ不審に思う箇所が多く、殆んど参考にしていない（というか、ならない）ことをお断りしておく。

＊

南人、相ひ傳ふ。

秦・漢の前に洞主「やぶちゃん注…村長。」の吳氏あり、土人、呼んで「吳洞」となす。兩妻を娶る。一妻、卒し、女有り、「葉限」「やぶちゃん注…現代仮名遣「しようげん」。この名は中国南部の伝説の女性の名として知られる。」と名づく。少なきより恵く、善く金を鉤る「やぶちゃん注…探し出した。」。父、之れを愛す。

末歳「やぶちゃん注…ある年の末。」に、父、卒し、後母に苦しめらるる所と爲る。常に險しきに樵らせ、深きに汲ましむ。時に、嘗て、一つの鱗を得たり。二寸餘りにして、積き伯鬻、金の目たり。遂に潜かに盆水に養ふ。日に長じ、數器を易ふるも、大にして、受くる能はず。乃ち、後ろの池中に投ず。女は、得させらるる所の餘食を、輒ち、沉めて以つて之れに食らはす。女、池に至れば、魚、必ず首を露はして岸に枕す。他人の至るも、復たと出でず。其の母、之れを知りて、毎に之れを伺ふも、魚、未だ嘗て見はれず。因りて、女に詐りて曰はく、

「爾、勞する無からんや」「やぶちゃん注…疲れてはいないかい?」。吾、爾が爲めに其の襦を新たにせん。」と。

乃ち、其の弊れし衣を易へ、後、他の泉に汲ましむ。里を計れば數百なり「やぶちゃん注…唐代の百里は約五百六十キロメートルで、あり得ない誇張である。」。母、徐ろに其の女の衣を衣て、利き刃を袖にし、池に行きて向かひ、魚を呼ぶ。魚、即ち、首を出だせり。因りて、之れを斫り殺す。魚、已に、長さ丈餘、其の肉を膳ふに、味は常の魚に倍す。其の骨を鬱棲「やぶちゃん注…人糞・獸糞などを貯留して「肥え」にする場所。」の下に藏す。日を逾えて、女、至り、池に向かへども、復た、魚を見ず。乃ち、野に哭す。忽ち、人、有り。被髮・粗衣にして、天より降り、女を慰めて曰く、

「爾、哭すなかれ。爾の母は爾の魚を殺せり。骨は糞の下に在り。爾、歸りて、魚の骨を取りて室に藏すべし。須らく、第に、之れに祈らば、當に爾に隨ふべし。」と。

女、その言を用ひ、金璣「やぶちゃん注…金と宝玉。」衣食、欲するに隨ひて具はれり。洞の節「やぶちゃん注…祭日。」に及び、母、往きて、女をして庭の果を守らしむ。女、母の行くこと遠きを伺ひ、亦、往く。翠紡「やぶちゃん注…翡翠の羽で紡いだもの。」の上衣を衣て、金の履を躡けり。

母の生みし所の女、之れを認め、母に謂ひて曰はく、
「此れ、甚だ姉に似たり。」

と。母もまた、これを疑ふ。「やぶちゃん注…このシークエンスはタイム・ラグがあつて少しおかしい。脱文或いは錯文が疑われる。」

女、覺りて、遽に反り、遂に一隻「やぶちゃん注…片方。」の履を遺し、洞人の得る所と爲る。

母、歸りて、但、女の庭樹を抱きて眠れるを見、亦、之れを慮らず。

其の洞、海の島に隣りし、島中に、國、有り、「陀汗」と名づく。兵、強くして、數十の島と、水界數千里に王たり。

洞人、遂に其の履を陀汗國に貨り、國主、之れを得、其の左右「やぶちゃん注…侍従。」に命じて、之れを履かしむるも、足の小なる者、履けども、一寸を減ず「やぶちゃん注…元の大ききより一寸小さくなつて履けなかつたのである。唐代の一寸は約三センチメートル。」乃ち、一國の婦人をして、之れを履かしむるも、竟に一つとして稱ふ者、無し。

其の輕きこと、毛のごとく、石を履むに、聲、なし。

陀汗王、

「其の洞人、非道を以つて之れを得しか。」

と意ひ、竟に禁錮して、之れを拷掠「やぶちゃん注…拷問。」すれども、遂に従つて來たる所を、知らず。

乃ち、この履を、以つて、是れを道旁に棄て「やぶちゃん注…この部分は文意が続かず、何らの錯文が疑われる。」、即ち、人家を遍歴して之れを捕へんとし、若し、女の履ける者有らば、之れを捕へ、以つて、告げさす。

陀汗王、之れを怪しみ、乃ち、其の室を搜し、葉限を得たり。

之れを履かしむるに信なり「やぶちゃん注…本人であつた。」。

葉限、因りて、翠紡の衣を衣て、履を躡きて進むに、その色「やぶちゃん注…姿。」や、天人のごとし。始めて、事を、王に具す。

魚骨と葉限とを載せて、俱に國に還る「やぶちゃん注…主語は王。」。

其の母及び女は、即ち、飛石と爲し、撃たれて死す「やぶちゃん注…石打ちの刑に処せられて沢山の石を投げつけられて死んだ。穴を掘つてそこに罪人を立たせ、庶民に次々と石を投げつけさせて殺す刑罰がイスラム圏に現在もあるが（罪名は不貞で男女を問わない）、それと同様のものであろう。」。洞人、之れを哀れみ、石坑に埋め、命けて「懷女塚」と曰ふ。洞人、以つて祓祀「やぶちゃん注…祭祀。」。「祓」中国古代に於いて祀られた神の名。」をなし、女「やぶちゃん注…女の子の出生。」を求むれば、必ず、應ず。

陀汗王、國に至り、葉限を以つて上婦と爲せり。

一年、王、貪り求めて、魚骨に祈り、寶玉、限り無し。年を逾えれば、復たと、應ぜず。

王、乃ち、魚骨を海岸に葬り、珠^{しゆ}「やぶちゃん注：真珠。」百斛^{こく}「やぶちゃん注：唐代で五千九百リットル。」を用ひて之れに藏^{かく}し、金を以つて際^{へり}と爲せり。徴せし卒^{むはん}の叛^{はん}する時に至りて、將に發^{あは}きて、以つて、軍を贍^{たす}けんとするも、一夕^{いちゆう}「やぶちゃん注：ある夜。」、海潮の爲に淪^{しづ}めらる。

成式「やぶちゃん注：作者。」の舊家人の李士元の説けるを聽けり。士元は、元、邕州^{ようしゅう}の洞中^{むらうち}の人にて、多く、南中の怪事を記し得たり「やぶちゃん注：記憶していた。」。

*

「東洋文庫」の今井氏は、本篇の注で熊楠の本論考にも言及された後、以下のように述べておられる。少し長い引用となるが、熊楠の考証と原拠本篇を理解する上で非常に重要なので、引かせて戴く。

《引用開始》

楊憲益^{ヤンシェンイー}「やぶちゃん注：一九一五年生まれで二〇〇九年没。中国文学の英語翻訳者として著名。妻は同じ仕事を成したイギリス人グラディス・マーガレット・テイラー (Gladys Margaret Tayler：中国名：戴乃迭)。文化大革命中、夫婦は四年刊投獄されている。」の「中国の掃灰娘^{サオハイニヤン} (Cinderella) 譚」に、『西陽雜俎』のこの話を全文抄録し、つぎのような案語「やぶちゃん注：中国語で「注釈」の意。」を加えている――この説話は、あきらかに、西方の掃灰娘 (Cinderella) 譚である。段成式は、西暦九世紀の人であり、この説話が、遅くとも九世紀、あるいは、八世紀にはすでに中国に伝わっていたことがあきらかである。篇末に、説話の語り手は邕州の人だという。邕州は、すなわち、いまの広西の南寧「やぶちゃん注：[ブルー・マップ・データでこい](#)。」である。この説話が、東南アジア経由で中国に入ってきたことがわかる。イギリス人、コックス (Marian Rolfe Cox) 「やぶちゃん注：マリアン・ロールフ・コックス (一八六〇年～一九一六年) はイギリスの民俗学者で、このシンデレラ伝承の研究家として知られる。」の考証によると、この説話は、ヨーロッパと近東で、合計、三四五種の大同小異の伝説がある。惜しいことに、この本はいま、さがすすべがない。ヨーロッパでもっとも流行した二種の伝説は、一七世紀 (原文「七世紀」。十七世紀) の誤植であろう) のフランス人、ペロー Perrault の物語集と一九世紀のドイツ人、グリム Grimm 兄弟の説話集に見られる。グリムの伝説によると、この「掃灰娘」の Aschenbrödel, Aschen という名の意味は、「灰」であり、英語の Ashes である。アングロ・サクソン語 Ascen, サンスクリットの Asan である。もっとも面白いのは、中国語テキストである。その娘は、依然、葉限という名である。あきらかに Aschen あるいは Asan の訳音である 「やぶちゃん注：[「葉限」は中国語カタカナ音写で「イエ・シエン」である。](#)」。通行の英語テキストは、フランス語テキストからの転訳である。そのなかで掃灰娘のはく鞋^{くつ}は琉璃^{ガラス}である。これはフラ

ンス語テキストでは、毛製の鞋（*Vair*）で、イギリスの訳者が琉璃（*verre*）と誤認したからであろう。中国語テキストでは、金の履くというけれども、『毛のように軽く、石をふんでも音がしなかった』というから、多分、本来は、毛でつくったものなのであらう（楊憲益『零墨れいぼく新端』に収む。一九四七年二月、中華書局刊、上海）。

ただ、楊憲益氏の指摘した、シンデレラの履いたくつが、ガラスか、それとも毛製のくつかという問題については、同氏の説明の仕方に疑問がある。シャルル・ペロー（Charles Perrault（一六二八―一七〇三年）の説話集とは、*histoires ou contes du temps passé avec des moralités*（in 1697）、またの名、*Contes de ma Mère Loya* であるが、ペローの説話集（ペンギン叢書本）の英訳者 G・ブレレトン氏 Geoffrey Breton によると、シンデレーフ（ペローでは、フランス語風に、サンドリヨンという）の履いたくつをガラス製としているのは、おびただしいシンデレラ説話のなかで、ペローとペロー以後の少数の版だけに見出されるという。最も古い版では、*verre*（ガラス）となっており、のちの版で、*vair*（白い毛皮）と改められているという。ガラスのくつに関しては、説話研究者の間で、かつてはげしい論争があったらしい。それは、別として、楊憲益氏の説明は、右の事実をとりちがえている。思うに、これは同氏の右論文執筆時期とかかわりがあるのかも知れない。同氏は、コックスの本は、「いま、さがすすべがない」という。動乱か、戦争による流亡の時期の執筆なのであらう。コックスの本とは、G・ブレレトン氏によると、つぎのとおりである――

Marian Rolfe Cox, *Cinderella: Three Hundred and Forty-five Variants of Cinderellas, Catskin and Capot` Rushes* (London, Folklore Society, 1893)

なお、シンデレラ譚は、ペローのものの中には、イタリアのジアンバステイスタ・パジーノ Giambastista Basile（一五七五―一八三二年）の『ペンタメローネ』*Pentamerone*（1634-6）に訳述されているという。くわしくは、つぎの英訳書の序説を見ていただきたい。

Charles Perrault: *Fairy Tales Translated with an Introduction by Geoffrey Breton* (Penguin Books, 1957)

《引用終了》

「やぶちゃん注：以下、底本では全体が一字下げ。」

「ペドロソ」の葡萄牙里談、第二十四頗る之れに似たり、云く、鰥夫「やぶちゃん注：「やもめ」。」あり、三女を有せるが長女次女は衣裳飾りのみし、季女「やぶちゃん注：「すゑむすめ」。」は好んで厨事を務めけるを、兩姉嘲て鼯猫「やぶちゃん注：「かまどねこ。」と呼り「やぶちゃん注：「よべり」。」、一日、其父一魚を獲、季女に料理を命ぜしに、季女其魚の

色黄に美なるを愛し、父に乞て之を自分の室に置き、水中に養ふ、夜に及び、魚女に向ひ、吾を井に放てと言しかば、起て之を井に投ず、翌日季女魚見んとて井に近くに「やぶちゃん注」：「ちかづくに」。魚「娘子井に來れ」と連呼す、女大に惧れて去る、次日、二姉宴會に趣ける不在中、季女復た井に近けば、魚呼ぶ事昨日の如し、因て進で井に入しに、魚女の手を牽て「やぶちゃん注」：「ひきて」。金玉の殿に導き、無比の美服を着、一雙の金履を踏せ「やぶちゃん注」：「はかせ」。輜車「やぶちゃん注」：「ろしや」。大きな車。」に乗て宴會に趨かしむ「やぶちゃん注」：「おもむかしむ」。戒めて曰く、必ず二姉に先つて退き、此所に來て衣飾を脱せよと、宴會に趣くに及び、満堂季女的美を驚嘆せざる無し、宴竟り「やぶちゃん注」：「をはり」。急ぎ去らんとせしに、履一を落し王に拾はる、王廻ち「やぶちゃん注」：「すなはち」。國中に令し、此履の本土を娶ん「やぶちゃん注」：「めとらん」といふ、季女家に還つて、井中の王殿に上り、衣を脱せる時、魚來て問ふ可き事有れば、今宵又來れと云ふ、二姉還りて、季女の厨事に急がしきを見、其日宴會で、無上の美人、金履を落し、王其持主を娶んと熱望する由を語る、又言く、吾等是より王宮に詣り、彼履を試みんに、一人の足必ず之を合ふ可ければ、后と爲し事必定也、爾時「やぶちゃん注」：「そのとき」。厨猫に一新衣を遣さんと、二姉出行くを見て、季女井に到るに、魚忽ち、「汝吾妻たるべし」と勸むる事甚だ力めければ「やぶちゃん注」：「つとめければ」。遂に従ひぬ、其時魚即ち化して人となり言く、吾は當國王の子、久しく呪封されて此井に在り、吾れ今日、汝が履を落せるより、吾父令して履主を娶らんと望むを知る、汝直ちに王宮に趣き、妾既に婚を君の子に約せりと言へり、季女、井を出で家に入れば、二姉還りて、二人の足如何にするも彼履に適せざりしと嘆き、季女吾も行て試んと言ふを聞き、大に之を嘲る、季女王宮に詣り、履を試るに、合ふて寸分を差え「やぶちゃん注」：「ママ」。「たがえ」。ざりければ、王之を娶んと言ふ、季女因て王子の告げし儘に答て、之を辭せしに、王驚喜措く所を知らず、百官を遣して井より王子を迎へ、竈猫女を娶らしめければ、兩姉羨み嫉み、恐言「やぶちゃん注」：「ママ」。「怨言」の誤りではないか？」を放て罰せらる、其後、王子父に嗣で立ち、竈猫は后たりと、按ずるに、古今魚類を崇め神とせる民族多し (F. Schultze, 'Fetichism', trans., New York, 1885, p.79; Frazer, 'The Golden Bough', 1890, vol.ii, pp.118-122; Leo Frobenius, 'The Childhood of Man', 1909, p.243. Seqq.) 例せば、鯉神變有り、山湖を飛越え、鱧「やぶちゃん注」：「やつめうなぎ」。夜北斗に朝し、之を殺さば罪を益す「やぶちゃん注」：「ます」。増す。」等、支那に靈魚の談多し (淵鑑類函卷四四一「やぶちゃん注」：「底本は「四四二」であるが、「選集」は「四四一」とし、原本を確かめたところ、後者が正しいので、特異的に訂した。)、本邦で魚を崇めし遺俗に就ては、本誌二八八及び二九一號を見よ「やぶちゃん注」：「これは既に既に電子化したもので、前者が山中笑の『本邦に於ける動物崇拜』であり、後者がそれを受けて熊楠が書い

た「本邦に於ける動物崇拜」である。」、又古え鮪、鰹、目黒「やぶちゃん注：「めぐろ」。ウルメイワシの異名。節分に魔除けとして鰯を掲げるとを想起せよ。」、鯛、鮓、「ヲコゼ」、「コノシロ」、鯖（玄同放言卷三）、鎌足^{カマスハセ}房前（石野廣通著繪そら言）「やぶちゃん注：「鎌足」と「房前」の間に特異的に半角の字空けを行った。」等、魚に資れる「やぶちゃん注：「よれる」。人名多く、神佛が特種の魚を好悪する傳説頗「やぶちゃん注：「すこぶる」。少なからざるは、今日迄蘇格蘭「やぶちゃん注：「スコットランド」。」、愛爾蘭「やぶちゃん注：「アイルランド」。」、地方に隨て魚を食ふに好悪ある（Gomme, op.cit., p.290）に同く、古え「トテミズム」盛んなりし遺風と見ゆ、古歐洲及び印度の諸神、魚形なりし例多く Gubernatis, 'Zoological Mythology', p.329 seqq. に出づ、古埃及「やぶちゃん注：「エジプト」。」に、魚神「レシ」あり、又鰻鱺「やぶちゃん注：「うなぎ」。」等諸魚を神とし、（Budge, 'The Gods of the Egyptians', 1904, vol. i, p.303; vol.ii, p.382）「日神「ラア」は二魚「アブッ」「アント」を使ふ」（'The Book of the Dead', trans. Budge, 1898, p.4）「古カルデア人、無智にて禽獸と別無かりしを、智神「エア」、晝間のみ海を出で、上陸して、言語、農工、書畫萬般を教えたり、此神は魚形也、其前後にも、斯る魚形神出で、民を開導せる事、佛教に一佛・二佛有るが如し（Maspero, 'The Dawn of civilization', London, 1894, p.565, &c; Boscawen, 'The First of Empires', 1903, pp.67—68）而して、魚屬其他動物の骨を尊敬する民族屢ば有るは Frazer, op.cit., pp.118—20, 122. seqq. に其論有り、去ば雜俎、葉限、魚骨に祈て福を得し話は、支那南部に、舊く斯る崇拜迷信行れたる痕跡ならん歟、履を手懸りとして美女を求むる話は、「ストラボン」（耶蘇と殆ど同時）の書に出づ、西曆紀元前六百年頃の名妓「ロドペ」浴する間に、驚其履を捉み去り、メムフキスの王の前に落せしを、王拾つて、其履の美にして小さきに惚込み、履主を搜索して、遂にロドペを娶れりとなり。

「やぶちゃん注：『「ロドロン」の葡萄牙里談』「5」で既出既注。

「第二十四」[「Internet archive」の英訳版（ロンドン・一八八二年）の「XXIV. THE MAIDEN AND THE FISH.」](#)。

「F.Schultze, 'Fetichism', trans, New York, 1885, p.79」[「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜（23：鮫）」](#)で既出既注であるが、再掲すると、ドイツの哲学者フリッツ・シュエ（Fritz Schultze 一八四六年～一九〇八年）の書いた「呪物崇拜」の一節。[「Internet archive」](#)で原本が見られる。[ここ](#)（右ページ左の中央）。直ぐ後にはミクロネシアでのウナギ崇拜の記事も続いている。

「Frazer, 'The Golden Bough,」イギリスの社会人類学者ジェームズ・ジョージ・フレイザー（James George Frazer 一八五四年～一九四一年）が一八九〇年から一九三六年の四十年以上、まさに半生を費やした全十三巻から成る大著で、原始宗教や儀礼・神話・習慣などを比

較研究した「金枝篇」(The Golden Bough)。私の愛読書の一つである。

「Leo Frobenius, 'The Childhood of Man,' 1909, p.243 Seq.」「[南方熊楠](#) 本邦に於ける動物崇拜 (23・鮫)」で既出既注。

「鰐」漢籍のそれであるから、これはハモではなく、脊椎動物亜門無顎上綱(円口類Ⅱ無顎類) 頭甲綱ヤツメウナギ目ヤツメウナギ科 Petromyzontidae に属する生物であるヤツメウナギ類である。体制が似ているために「ウナギ」の呼称がつくものの、生物学的には、タクソン上、魚上綱に含まれないため、魚ではないという見解があるが、では、その習性から、魚に付着して体液を吸引する魚類寄生虫とするのも、私には馴染まない気がする。複数種が知られるが、本邦の場合は食用有益種としては同科ヤツメウナギ目 Petromyzontiforme のカワヤツメ(ヤツメウナギ) *Lampetra japonica* 及びスナヤツメ *Leheneron reissneri* である。両

者はともに中国北部にも分布するので、これらに比定しても構わないだろうが、ヤツメウナギ類は実に世界で三科十属三十八種がいる(中国・日本に分布しない種も含む)ので、中国のそれは、他の種も含まれると考えた方が無難である。ヤツメウナギ類はウナギ類のレプトセファロス (Leptocephalus) 同様に、幼生が成魚と大きく異なった形態をしており、アンモシテス (Ammocetes) と呼ばれる。幼生は目が皮下に埋没していて、無眼に見え(但し、負の走光性を示すので感覚器としては機能していると思われる)、口吻もロート状又は頭巾状(成魚は吸着吸引に特化した吸盤状)で、川床の泥中に四年間程(ある記載では一〜七年と幅が広い)、底棲している。変態後(変態後は開眼する)は海に下り、魚類に吸着して体液を吸う(ヤツメウナギ目には降河しない種があり、彼等は産卵まで餌を全くとらないという)、二〜三年後(スナヤツメではこの期間が短く半年程度であるらしい)に産卵のために、再び、川に遡上する。その際にはもう摂餌をせず、目も消化管とともに退化してしまい、体長もアンモシテス期より逆に小さくなるとも言う。再び盲い、飲まず食わずで身を細らせたの皮つるみ、そして死——ドラキュラのごとく忌み嫌われる彼等も確かな生物の厳粛な営みの中にいる(後半のアンモシテス幼生とライフ・サイクルについては幾つかの記載を総合的に参照した)。私の古い電子化注である[寺島良安の「和漢三才圖會 卷第五十 魚類河湖無鱗魚」](#)の「鰐 やつめうなぎ」の項を参照されたいが、そこで李時珍の「本草綱目」を引いて、

*

頭の斑点、七つ有り、北斗の象^{かたち}を作す^な。夜は、則ち、首を仰^{あをむ}け、北に向ひて、北斗に朝す自然の禮、有る故、字、「禮」の省^{はぶ}く^{したが}に从^{したが}ふ。蛇と氣を通じて、色、黒く、北方の魚なる故、「玄」・「黒」・「烏」の諸名有り。

*

という、辛気臭い載道的生態行動解釈が載る。ヤツメウナギは体側の目のやや後方に七つの鰓孔を持つところから命名されているが、鰓孔は後部に向って体に平行に等間隔で開いており、北斗星の形などにはなっていないから、数の相同を牽強付会したに過ぎない。私は八目鰻を親しく観察したことはないから、確証を持つては言えないが、このような実際の生態行動はないであろう。北斗星は中国では古来より時刻・季節の推移を予兆する星として重要視され、後に道教の北斗神君などとして神格化され、寿命・禍福を司るものとして信仰された。また、この「朝す」とは「拜む・礼拝する」の意である。則ち、「八目鰻は夜になると、首を仰向けにして、常に北に向け、神聖な北斗神君のシンボルであるところの北斗星を『禮』拝し、自然の『礼』をとり行うが故に、その漢字は『禮』を省略して〔示〕を「魚」に換えて『鰻』という字に造るのである」というトンデモない意味なのである。なお、中国語では「大鰻」の意が第一義にある。

「淵鑑類函卷四四一」同書は清の康熙帝の勅により張英・王士禎らが完成した類書（百科事典）。一七二〇年成立。「[中國哲學書電子化計劃](#)」の四百四十一巻の「魚一」にござり書いてあるが、よく見ると、「鯉最爲魚中之主形既可愛又能神變乃至飛越山湖所以琴高乘之」とあり、「雅俗稽言曰鰻俗呼烏魚又名火柴頭頭戴七星夜禮北斗道家謂之水厭忌食之養生家亦忌其膽臘月收取陰乾遇喉急痺少許點之即愈白小銀魚也小於麵條鱗魚初夏有餘月無故謂之」とあるのが、熊楠のネタ元であることが判る。

「古え鰩、鰻、目黒、鯛、鮒、「ヲコゼ」、「コノシロ」、鯖（玄同放言卷三）」曲亭馬琴の隨筆で琴嶺（馬琴の長男）・渡辺崋山画。文政元（一八一八）年から同三（一八二〇）年刊。天然・人事・動植物について和漢の書から引用して考証を加えたもの。「玄同」は「無差別」の意。当該部は卷三上の「第廿九」の「人事」にある「姓名稱奈謂」の一節。[「KuroNet」](#)「[ずし字認識ビューア](#)」のこの左頁二行目の「鯨」から始まる魚名を名前に持つ（人名魚尽くし）の箇所。以上を視認して訓読し、電子化する。表題は底本では囲み野であるが、「」で挟み、目立つように太字にし、且つ、改行した。【】は割注。一部に句読点・記号を添え、また、変更もした。なお、本来ならば、「鯖」までの引用で十分なのだが、今少し、魚類関連のものが続くので、このパートの最後まで電子化しておいた。

*

【鯨【クジラ】】には、同名多かり。大伴の連鯨、【書紀】廿三。舒明紀。】河内の直鯨、【同廿七。天智紀。】民の直鯨、【同廿八。天武紀。】廬井の連鯨、【同紀。】粟田の朝臣鯨、【續日本後紀】。十六。】大伴の宿祢鯨、【同――】。刑部造眞鯨、【三代實錄】七。清和紀。】。【鮪【シビ】】も亦三人あり。八口の采女鮪女、【書紀】廿三。舒明紀。】物部の朴井の連鮪、【同廿五。齊明紀。】吉士小鮪、【同廿七。天智紀。】この他、「萬葉集」第十六に、土師の

宿祢水通、字は志婢麻呂、といふ者見えたり、この志婢も、鮪の假名にはあらぬか。考べし。

【堅魚【カツヲ】】をもて、名とせしは、石上の朝臣勝雄、【「續紀」十一。聖武紀。】河原の毗登堅魚、【同卅。孝謙後紀。】縣犬養の宿祢堅魚麻呂、【同卅七。桓武紀。】安倍の朝臣堅魚、【「殘缺後紀」廿二。嵯峨天皇紀。】大伴の宿祢雄堅魚、【又、小堅魚に作る。】「殘缺後紀」廿二。【伴の宿祢眞堅魚、【「類聚國史」九十九。天長中の人なり。】】この他、豐岡の宿祢眞黑麻呂、【「續後紀」二。】この眞黑麻呂の眞黑も、目黑堅魚の事ならんか。目黑堅魚の名目は、【東鑑】に見えたり。

【鯛】をもて、名とせしものは、凡の直鯛、【續紀廿九。孝謙後紀。】大中臣の朝臣鯛取、【「殘缺後紀」十七。平城天皇紀。】安倍の朝臣鯛繼、【「續後紀」七。】高道の宿祢鯛釣、【同八。】この他、鯛身の命、【「姓氏錄」十八。】小鯛王、【「萬葉集」十六。】又、仁明天皇嘉祥二年、十一月廿日、賣買家地の券書に、秦の忌寸鯛女【「好古目錄」上卷。】あり。

【鯽魚【フナ】】にも、亦、同名あり、吉備の品運部の雄鯽、【「書紀」十。應神紀。】難波玉造部の鯽魚女、【同十五。欽明紀。】鴨の朝臣子鯽。【「續紀」十八。孝謙紀。】

【鰩【をこし】】「やぶちゃん注」オコゼのこと。】にも、亦、同名あり。物部尾興、【「書紀」十九。欽明紀。】蘇我の臣興志、【同廿五。孝德紀。】尾張の宿祢乎己志、【「續紀」四。元明紀。】大神の朝臣興志、【同六、同紀。】凡の連男事志、【同九。元正紀。】これらの名すべて「鰩」の假字なり。

【鯛魚【このしろ】】にも、亦、同名あり。鹽屋の鯛魚、【「書紀」廿五。孝德紀。分注に云はく、】鯛魚は、此に云ふ「拳能之廬」【「やぶちゃん注」実際に魚の「コノシロ」にこの漢字四字を当てる。】。堺部の宿祢鯛魚。【同廿九、天武紀。】

【鯖【さば】】にも、亦、二人あり。紀の朝臣鯖麻呂、【「續紀」卅八。桓武紀。】田口の朝臣佐波主、【「續後紀」四。】この他、林の宿禰娑婆【「殘缺後紀」五。桓武紀。】あり、こは娑婆國の娑婆なるべし。

この餘、魚をもて名とせしもの、衆夥なり。枚挙に遑あらず。按ずるに、魚は陰中の陽なり。こゝをもて、むかし、百官の名に、多く取れるなるべし。

【蠹海集】「やぶちゃん注」宋の王達著。天文・地理・人身・庶物・曆数・氣候・鬼神・事義類に分類した雑考。】に【庶物類。】曰はく、『水族は、乃ち、陰中の陽なり。何を以つて其の然を「やぶちゃん注」「しかるを」。知るか』云々、『魚、乃ち、陰物にして、陽氣を得ること多し。故に腹内、脰「やぶちゃん注」浮袋。】を生ず。是れを以つて、能く浮き躍る「やぶちゃん注」ママ。】。魚の目は、晝夜、眠らず。因りて、其の、陰物、爲ども、陽を得ること、多き者なるを知るなり』といへり。この「小」をもて「大」に譬ば、人主は陽

なり、庶民は陰なり、百官は陰中の陽なり、之加、諸魚、天神御子に仕奉りし故事あり。
「古事記」【上巻】に、天津日高日子番能迺迺藝命、天降まして、竺紫の日向之高千穗之
久布流多氣に座せしとき、底度久御魂、都夫多都御魂、沫佐久御魂等、猿田毗古古命を送
て、還り到的條下に云はく、『乃ち、悉く鰭廣物・鰭挾物を追聚へて、以て問へらく、「汝
は天神御子に仕へ奉らんや」と言ふ時に、諸の魚、皆、「仕へ奉らん」と白すの中に』云々、
後生の大臣、名を鰭介に取るものゝ多かりしも、これらに縁ての事なるべし。

又、按ずるに、同書【上巻】に、大穴牟遲神、欺れて、八十神に焼れ給ふ段に云はく、
『神産巢日之命、時に乃ち、黒貝と蛤貝比賣命とに告り訓て「やぶちゃん注：ママ。」作活』
云云といへり。鰭介をもて、名とすること、はやく、こゝに見えたり。

又、按ずるに、都の宿祢腹赤【「類聚國史」九十九。弘仁十四年正月叙位。】と、栗の宿祢
鰭麻呂【「三代實錄」六。】とは、その名を等類とせんか。一説に『「腹赤」は「鰭」なり』
と、いへり。今、俗は、「鰭」の子を「腹赤子」といふなり。又、一説に、『「腹赤」は地の
名なり。肥後の國玉名の郡、長渚「やぶちゃん注：漢字表記はママ。」に、「腹赤濱」あり。
この海濱にて漁取る魚を、「久尔倍」「やぶちゃん注：ニベのことではないか?。」といふ。
「腹赤」は、即ち、「久尔倍」の事なり。その濱によりて、名を得たり』と、いへり。いま
だ孰か是を、しらず。「江家次第」【卷之一。元日節會。】腹赤の奏の條下を考ふべし。

*

「鎌足 房前（石野廣通著繪そら言）」石野廣通（享保三（一七一八）年～寛政一二（一八〇
〇）年）は旗本で歌人・国学者。本姓は中原。家禄三百石。従五位下・遠江守。「繪そら言」
寛政九（一七九七）年頃に成ったかなりくだけた調子の考証隨筆。[国立国会図書館デジタル
コレクションのこちらで読め](#)、当該部は[ここ](#)（左ページ八行目から。直前で藤原鎌足を出し
ておいて、

*

「御存の通り愚臣が名はかますにて、むかし魚の名を付事はやり物のやうにて、君の御
骨折らせ打亡されし入鹿なども海豚といふ魚の名を付、鮪の大臣なども魚の名、蘇我の赤兄
なども赤鰭といふ魚の名、鹽屋の連鰭（齊明御宇の頃の人）そのゝち廬井造（天武の御宇の
人）、又愚臣が孫の房前などもふさゝきにてはなく、房はほう前はぜんにてはぜといふが實
の義、すなはち鯨の名なるをとへ誤れり、此外にも魚の名付たる人あまた也、もろこしに
ても伯魚といひ鯉といひ玄孫を禮鮒といふ、祝鮓といふも魚の名也、魚の名付侍る事大鰭鵜
尊（仁徳天皇）「やぶちゃん注：「鰭鵜」はミソサザイを指す。」木兎宿禰（武内）隼別王子
（人徳の弟）飯豊も（人徳の曾孫）鳥の名也、其外、數々こゝにひたつるに及ばず、臣が
名をかますと申證據は足の字はそくともすうとも兩音にて、論語にも足恭をすうきやうと

よむが如く、足はすうの音にて鎌足と書ても鎌子と書てもかますなるを、子の字もつねに申金子などのすといふには心付ずして、鎌足一名は鎌子とぼへ大系圖などには大職冠鎌たり一名鎌子としるせり、入鹿退治の時かまをもつて打たるゆゑ名付て淨瑠璃にも大津眞島を宿禰兼道が鎌をもつては向ふ思ひ入、これは百姓すがたにやつして居れば相應によく取合せてつくりたれど、それがし何故帶劔を用ひずにも子麿等と同時劔をもつて入鹿をきることたしかにしるせり、其鎌をおさめた所を鎌倉山といふなふなどとはひかげんなうそを取つけいひなす義に候と申さるれば、しへいの大天尊公にはしかなれども、後代までおろそかにはいはず、名武峰にある所の御像が明應七年にやぶれたる時も、國家に變ある時はいにしへより御廟鳴動し、御像やぶれさくるなどゝあがめ申さるゝ、誠に御本望の至り也、〔やぶちゃん注…以下略〕

*

てな感じで、何となくこの人、博識なんだろうが、どうも好きになれない文章だ。

「Gomme, op.cit., p. 290」前に出たイギリスの民俗学者ジョージ・ローレンス・ゴム (George Laurence Gomme 一八五三年～一九一六年) の一九〇八年の著作「歴史科学としての民間伝承」。ずっと後の版だが、[「Internet archive」の原本のこゝで読める](#) (左ページ)。

「Gubernatis, `Zoological Mythology`, p. 329 seqq.」「Gubernatis」はイタリアの文献学者コオウト・アンジェロ・デ・グベルナティス (Count Angelo De Gubernatis 一八四〇年～一九一三年) で、著作の中には神話上の動植物の研究などが含まれる。この「動物に関する神話学」は[「Internet archive」のこちらで原本の当該箇所を読める](#)。

『魚神「フシ」』「Budge, `The Gods of the Egyptians`, 1904, vol. i, p. 303; vol. ii, p. 382」イギリスの考古学者エルネスト・アルフレッド・トンブソン・ウォーリス・バッジ (Ernest Alfred Thompson Wallis Budge 一八五七年～一九三四年…古代エジプト・アッシリア研究者として大英博物館の責任者を長く務めた) の原本の当該部は「Internet archive」で見られ、[第一巻がこちらの右ページで](#)、英文の「レミ」の綴りは「Remi」で、舌から六行目の頭にヒエログリフ (hieroglyph) が記され、そこにスズキ目ベラ亜目カワスズメ科 Cichlidae カワスズメ (ティラピア: Tilapia) を表わすそれが記されており、英文では「the Fish-god」とある。[後者の第二巻のそれは同書の最後の部分で](#)「382」ではなく「383」ページの一行目末から三行目にかけてに、

*

The Phagrus, or eel, was worshipped in Upper Egypt, and mummied eels have been found in small, sepulchral boxes.

*

と書かれてある。「Phagnus」とはスズキ目タイ科マダイ亜科マダイ属ヨーロッパマダイ *Pagrus pagrus* である。しかし、この英文には、正直、ちょっと驚いた。ミイラ化されたウナギが墓の中の箱から発見されているとあるのである。これはもう、確かに神さまだわ！

「The Book of the Dead」trans. Budge, 1898, p. 4」[「Internet archive」の原本のつづ](#)。太陽神ラー（英文綴りは「Ra」）が使役する魚として「*Abju*」及び「*Ani*」が記されてある。

「古カルデア人」ウィキの「カルデア」によれば、カルデア（Chaldea・Chaldea）はメソポタミア南東部に広がる沼沢地域の歴史的呼称で、紀元前十世紀以降に『この地に移り住んだセム系遊牧民の諸部族はカルデア人と呼ばれるようになった。カルデア人は紀元前』七『世紀に新バビロニア王国を建国した』。『短命に終わったバビロン第』十一『王朝』（紀元前六世紀）『を、歴史家は慣習的にカルデア王朝、カルデア帝国、あるいは新バビロニア王国と呼ぶ。と言っても、この王朝の歴代の支配者のうち、カルデア人であると分かっているのは最初の』四『人だけである。最後の支配者ナボニドウス（そしてその息子であった摂政ベルシャザル）の出自ははっきりしていないが、一説にはアッシリア出身とも言われる』。『カルデア人が定住した地域はバビロニア南部にあり、主にユーフラテス川の東岸沿いにあった。カルデアという名は一般にメソポタミア南部全域を指す言葉として使われるようになったが、本来のカルデアは実のところ、ユーフラテス川とチグリス川の堆積物によってメソポタミア南東端に形成された、この』二『つの川の流れに沿った長さ約』六百四十四キロメートル、幅およそ百六十一キロメートルに『広がる広大な平原であった』。『ヘブライ聖書ではカルデア人を指して』「カスディム」という言葉が用いられており、七十人訳聖書ではこれをカルデア人と翻訳している。アブラハムの出身地もカスディムのウルと書かれている。『古代ギリシア人がカルデア人』（カルダイオス）と呼んだのは、バビロニアがアケメネス朝ペルシアの支配を受ける前のバビロニアの支配階級であった。現在ではカルデア人がバビロニアの最初の定住民であったとは考えられていないが、ヘレニズム期の歴史家シケリアのディオドロスは、カルデア人を最古のバビロニア人とした。古代世界においてカルデア人は天文学・占星術を発達させていたことで高名であり、「カルデア人の知恵」とは天文学・占星術のことであった。『占星術を司るバビロニアの知識階級』乃至、『祭司階級を』単に『カルデア人と呼ぶようにもなった』。『カルデア人が使用した言語はアッカド語のバビロニア方言であった。これはアッシリア・アッカド語と同じセム語であるが、発音と文字に若干』、『変わったところがある。後期にはアッカド語のバビロニア方言もアッシリア方言も話されなくなり、メソポタミア中でアラム語がこれに取って代わった。アラム語は今日までイラクとその周辺国のアッシリア人と呼ばれるキリスト教徒（アッシリア東方教会やカルデア・カトリック教会）『の信徒』の母語であり続けている（アッシリア現代アラム語、カルデア

現代アラム語)』とある。

「一佛・二佛」通常は釈迦如来と弥勒菩薩を指す。千仏という謂いもあり、これは過去・現在・未来の三劫にそれぞれ現れるという千人の仏で、特に現在の賢劫の千人の仏を指し、釈迦はその四番目の仏とされる。

「Maspero, 'The Dawn of civilization,' London, 1894, p. 565」フランスの考古学者ガストン・カミーユ・シャルル・マスpero (Gaston Camille Charles Maspero 一八四六年～一九一六年)。一八六九年から高等研究実習院でエジプト語を講義し、一八七四年にはコレージュ・ド・フランス (Collège de France : 国立フランス教授機関) で、ロゼッタ・ストーン解読やヒエログリフ解明で知られる「古代エジプト学の父」ジャン＝フランソワ・シャンポリオン (Jean-François Champollion 一七九〇年～一八三二年) の後継の地位に就いた。一八八〇年にエジプトへ派遣され、オギュスト・マリエット (Auguste-Ferdinand-François Mariette 一八二一年～一八八一年) の後を継いで、エジプト考古学庁最高責任者となった。また、政府の委託でカイロ考古学研究所を設立したことでも知られる。カイロ博物館の第二代館長でもあった(以上は彼のウィキに拠った)。当外原本は刊行年が異なるが(1897年)、ここでもよろう。

カルデア人の記載が続き、尾鰭を持った半人半魚の二体の神像画が示されており、次の「566」の十行目に「Ea」の神名を確認出来る。

「Boscawen, 'The First of Empires,' 1903, pp. 67—68)」筆者はアッシリア学者ウィリアム・セイント・チャド・ボスコウエン (William Saint Chad Boscawen 一八五四年～一九一三年)。「Internet archive」で原本が見られ、当該箇所はここ。左ページ下方から「Ea」の記載が始まる。

『「ストラボン」(耶蘇と殆ど同時)の書』古代ローマ時代のギリシア系の地理学者・歴史家・哲学者ストラボン(ラテン語文字転写: Strabo 紀元前六四か六三年～紀元後二四年頃の書いた全十七巻から成るギリシャ語で書かれた「地理誌」(同前: Geographik: ゲオグラフィカ)であろう。この大著は当時の古代ローマ人の地理観・歴史観を知る上で重要な書物となっている。

『西暦紀元前六百年頃の名妓「ロドペ」浴する間に、驚其履を捉み去り、メムフキスの王の前に落せしを、王拾つて、其履の美にして小さきに惚込み、履主を搜索して、遂にロドペを娶れりとなり』平凡社「世界大百科事典」の「履物」の「履物と文化」の「西洋」の項に以下のようにある。「ロドペ」の伝承もさること乍ら、全体に本篇との親和性の高い内容なので、前の部分も含めて引く(コンマは読点に代えた。言っておくが、私は同事典の CD-ROM 版を正規に購入して所持している)。

《引用開始》

片方の履物にまつわる多くの伝承がギリシア文化圏にはある。トゥキュデデスは、プラタイアイの兵士の一隊が片方のみはだしで城塞(じようさい)から脱出したことを伝え(《戦史》第3巻22章)、女怪ゴルゴンを退治したペルセウスはサンダルを片方しかはいておらず、片方のサンダルの男に注意せよとの神託を受けていたイオルコス王ペリアスの前に現れたイアソンはそのままの格好であったために、金羊皮を求めて旅に出ることになる。UDフレイザーは《金枝篇》で、はだしの右足を犠牲獣の皮の上に置いて行われるギリシアの宗教儀礼に言及しているが、履物の片方だけをはいたいわば異形の姿と、神の加護あるいは神意の顕現という観念には強い関連のあることが予想される。なお、ヘロドトスによれば、ペルセウス崇拜はエジプトにも及んでおり、ケンミスなる町にはその神殿があるが、ペルセウスはしばしばここを訪れ片方のサンダルを残していくという。そして、このサンダルの出現はエジプトの繁栄を約する吉兆であると信じられている(《歴史》第2巻91節)。

またヒュギヌスによれば、ヘルメスには次のような伝説がある。すなわちヘルメスは美神アフロディテに恋したが拒まれ、これを哀れんだゼウスが鷲に変じてアフロディテのサンダルの片方を盗んで彼に与えたため愛はかなえられた。同趣向の伝説はストラボンも伝えており、鷲に盗まれたロドペ Rhodope のサンダルの片方がエジプト王プサメテイコスの胸の上に落ち、王はその持主を国中に捜し求めたという。いずれも履物と愛の成就、後者はさらに身元確認の主題が結びついている点で、シンデレラの《ガラスの靴》などの共通性や、履物の性的な象徴性を示唆しており興味深い。なお、履物が身元の証明の手だてとなる例はテセウスの伝説にも見られ、上記ペルセウス、ヘルメスとともに有翼のサンダルの持主として知られる。

《引用終了》

熊楠の表記する「メムフキスの王」は、この引用によれば、エジプト第二十六王朝初代ファラオ(在位…紀元前六六四年～紀元前六一〇年)のプサメテイコス(「プサムテク」とも表記)一世のことであろう。」

予現に参考書を缺くを以て、欧州「シンデレラ」物語の最古きは、何時代に記されたるを詳かにせず、隨て、此譚の早く筆せられしは、東西孰れに在るを斷ずる能はずと雖も、兎に角、千餘年前に成し西陽雜俎に、此特色ある「シンデレラ」物語を書付たる、唐の太常卿、段成式の注意深かりしを感謝する者也、この人相國文昌の子、詩名高く、宏學博物、殆ど張華「プリニウス」の流也、(尉遲樞の南楚新聞に、今より千四十八年前、咸通四年六月、卒せる後、其靈書を友人溫庭因筠に贈る由載たり)、平素好んで書を藏し、又下問を耻ず「やぶちゃん注…「はぢず」」、天上天下、方内方外の異譚奇事を録して、西陽雜俎二十卷、續集十卷を撰

せり、唐代の事物、是れに據て初て見るべき者頗る多し、然るに楊慎の丹鉛總錄卷五、段成式好張虛大之言、其著西陽雜俎、亦似郭子橫洞冥記、唐人杜陽雜編全構虛誑、殊無一實也「やぶちゃん注」…[「中國哲學書電子化計劃」の原本影印本の当該部を確認し、一部の漢字の誤りを訂した。](#)」と評し、江村北海も亦雜俎を丸啞「やぶちゃん注」…「まるうそ。」也と排せり、こは後世支那人が、書籍の穿鑿のみに腐心して、實際に迂なると、吾邦の儒者が、世界の廣き事を知らざる僻言「やぶちゃん注」…「まるうそ」に依じて「ひがごと」と読んでおく。」にて、成る程段氏の記述に怪異の事多きも、是れ却つて、當時唐土に行はれたる迷信、錯誤の實況を直筆せる者なれば、其頃支那に於る一汎人智の程度を察するに最も便利有る事、歐州にも、遠く「アリストテレス」「プリニウス」より、中頃天主教諸大徳を歴て、近く「ゲスネル」「アルドロヴンツス」に至る迄、牛屍を埋れば蜜蜂に化し、人の脊髓死して蛇となり、露「やぶちゃん注」…「つゆ。」海に入て眞珠と變じ、航魚「やぶちゃん注」…底本は「タコウネ」。[初出](#)は「タコフ子」(「子」は「ネ」の漢字型表記)。初出に従い、「子」をカタカナ表示した。を見れば凶事有り、印魚「やぶちゃん注」…底本は「コバンネ」。[初出](#)は「コバンフ子」(「子」は「ネ」の漢字型表記)。初出に従い、同前の仕儀で示した。」は訴訟事件を長引かし、印度の象は毎度龍と鬪て相討ちて果る、其外、人魚山男抔、呆れ返つた事共を飽く迄夥く書連ねたるに異ならず、段氏が智識を求る用意極めて周到なりしは、卷十八に、諸外國の植物を載せたるに、啻に記文の詳きのみならず、多くは其本國名稱を添たり、紫鯽の眞臘名勒佉(ラツク)、波斯棗「やぶちゃん注」…「ペルシアなつめ」のペルシア名窟莽(クルマ)、扁桃の波斯名婆淡(バダム)、無花果のペルシア名阿駟(アンジル)、拂林名底珍(「アラビヤ」名ティン)等也(De Candolle, 'Origin of Cultivated Plants,' 1890, passim.)、從來「エゴノキ」に宛てたる齊墩果如き、其記載の正確なるが上え「やぶちゃん注」…ママ。、雜俎に波斯名齊墩、拂林名齊虛「やぶちゃん注」…「虚」は「選集」では「虚」に「尸」を懸けた字。」と擧げたるはペルシア語 *setum* ヘブリウ語 *sait* に恰當「やぶちゃん注」…「かふたう(こうとう)」。相当。すれば、實は「オリヴ」樹の事也(明治四十年十二月、東洋學藝雜誌、拙文「オリヴ」樹の漢名に出)、其卷十九に見ゆる、梁の延香園の異園の如き、詳細の記載、明かに「コムソウダケ」の或種を眼前に想見せしむ、(予の「The Earliest Mention of Dicyophora, Nature, vol. 1, 1894」其驗仙書、與威喜芝相類と云るは、偶ま、以て、支那の古道士輩が、自然に、窒素分多き菌類の、畜肉と等く滋養分に富るを覺て「やぶちゃん注」…「さととりて」)、之を嗜み重んじ、隨て菌類に就て智識廣かりしを、諒するに足れり(仙書に、上帝肉芝を某仙に賜ふと有るは、紀州抔に多き *Fistulina hepatica* ならん、形色牛肉に酷似し、且つ鮮血様の紅液を瀝る「やぶちゃん注」…「たれる」)。故、英語に牛肉蔬(ヴェジタブルビーフステーキ)と呼ぶ)同卷に見ゆる、昆明池水網藻の記は、支那人が歐人に前て「やぶちゃん注」…「さ

きだちて」〕¹「アンニンドロ」(英語 water Net) を識りしを證す、(予の「The Earliest Mention of Hydroclivityon, Nature, vol. lxx, 1904」²、又松下見林の異稱日本傳卷上にも引る如く、雜俎三に「やぶちゃん注」以下の引用は「西陽雜俎」及び「異稱日本伝」を閲するに脱字があったので特異的に訂しておいた。)、國初、僧云玄奘往五印取經、西域敬之、成式見倭國僧金剛三昧、言嘗至中天、寺中多畫玄奘麻屨及匙筯、以綵雲乘之、蓋西域所無者、每至齋日、輒膜拜焉と有り、見林之を評して、眞如親王羅越にて遷化し給ひけるを、師鍊賛して曰、自推古、至今七百歲、學者之事西遊也以千百數、而跂印度者、只如一人而已、蓋不考金剛三昧事也と言ひ、件の千餘年前に渡天の壯行を遂げたる日本僧は、其姓名すら本國に傳存せざれども、吾邦曾て斯る偉人を出せしを知り得るは、一に親しく之に遇せし話を、雜俎に載たる段氏の賜物也(予の「The Discovery of Japan, Nature, vol. lxxvii, p. 611, 1903 参照」)

〔やぶちゃん注〕：「太常卿」「たいじやうけい」。天子の宗廟の祭礼を職掌とした。

「張華」三国時代の魏から西晋にかけての政治家で文人の張華(二三二年～三〇〇年)。彼の書いた幻想的博物誌にして奇聞伝説集である「博物志」全十巻はよく知られる。

「プリニウス」古代ローマの將軍で博物学者ガイウス・プリニウス・セクンドゥス(Gaius Plinius Secundus 二三三年～七九年)。大百科全書「博物誌」三十七巻を編み、古代科学知識を集成した。ベスビオ火山噴火の際、調査に行き、遭難死した。甥の政治家ガイウス・プリニウス・カエキリウス・セクンドゥス(Gaius Plinius Caecilius Secundus 六二年頃～一四年頃)と区別して「大プリニウス」と呼ばれる。

「尉遲樞の南楚新聞」底本は「南楚紀聞」であるが、調べたところ、誤字であることが判ったので、特異的に訂した。「尉遲樞」(生没年未詳)は晩唐の人で、この「新聞」とは「風聞」の意で、そうした南楚の風聞を記した隨筆。完本は伝わらないようであるが、「中國哲學書電子化計劃」のこちらで引用文の集成が読め、そこに「太平廣記」卷三百五十一からとして、

*

○段成式

太常卿段成式、相國文昌子也、與舉子溫庭筠親善、咸通四年六月卒。庭筠居閑輦下、是歲十一月十三日冬至、大雪、凌晨有扣門者、僕夫視之、乃隔扉授一竹筒、云、「段少常送書來。」庭筠初謂誤、發筒獲書、其上無字、開之、乃成式手札也。庭筠大驚、馳出戶、其人已滅矣。乃焚香再拜而讀、但不論其理。辭曰、「慟發幽門、哀歸短數、平生已矣、後世何云。況復男紫悲黃、女青懼綠、杜陵分絕、武子成卷君。自是井障流鸚、庭鐘舞鵠、交昆之故、永斷私情、慨慷所深、力占難盡。不具、荊州牧段成式頓首。」。自後寂無所聞。書云卷君字、字書所無、以意讀之、當作群字耳。溫段二家、皆傳其本。子安節、前沂王傳、乃庭筠婿也、自說之。

*

とある。

「咸通四年」唐末期の八六三年。

「溫庭筠」(おんていいん 八一七年?～八六六年?)は晩唐の知られた詩人。娘は段成式の子の段安節の妻となり、宰相であった温彦博びんはくの末裔に当たる。晩唐を代表する詩人の一人で、同時代の妖艶にして唯美的な詩風で知られる李商隱(八十二年又は八一三年～八五八年)とともに「温・李」と並び称される。優れた才人であったが、[彼のウィキ](#)によれば、『試験場で隣席の者のために詩を作ってやったり、遊里を飲み歩いて警官と喧嘩をしたりするなど、軽率な行爲が多く、科挙には』結局、『及第出来なかった。宰相の令狐綯(れいこうとう)』の家に寄食したが、令狐綯を馬鹿にしたので追い出された』。八五九年頃、『特に召し出されて試験を受けたが、長安で任官を待つ間、微行していた宣宗に会い、天子と知らずにからかったので、随県の県尉に流された。襄州刺史の徐商に招かれ、幕下に入ったこともあるが、満足せず、辞職して江東の地方を放浪し、最期は零落して死んだ』。『詩風は六朝時代の宮体詩に近く、同年代の李商隱に比べてやや退廃的。また、温庭筠の性格も相まって少々』、『軽薄な美しさがある。李商隱と共に、宋代初期の西崑体に強く影響を残している』。現在、「温飛卿詩集」九巻が残る、とある。

「楊慎の丹鉛總錄巻五、……」(一四八八年～一五五九年)は明の学者・文学者。一五一一年に進士に及第して翰林修撰となった。後に世宗嘉靖帝が即位した際、その亡父の処遇について帝に反対したため激怒を買ひ、平民として雲南永昌衛に流され、約三十五年間を配所で過して、没した。神童の呼び名高く、十二歳の時に書いた「古戰場文」は人を驚かし、詩は政治家で詩壇の大物として一時期を作った李東陽に認められた。博学で、雲南にあって奔放な生活を送りながらも、多くの著述を残した。その研究は詩・戯曲・小説を含め甚だ多方面に亙るが、特に雲南に関する見聞・研究は貴重な資料となっている。著作は「升庵全集」全八十一巻に収められている。以下、訓読しておく。

*

段成式、虚大の言を張るを好む。其の著「西陽雜俎」、亦、郭子横が「洞冥記」、唐人の「杜陽雜編」に似て、全く虚誑きょきやうを構へ、殊とつけ、一つの實じつも無きなり。

*

この『郭子横が「洞冥記」』は後漢の郭憲の撰になる道教系の志怪小説集。「杜陽雜編」は晩唐末期の進士蘇鶚そがくの撰になる伝奇小説集。

「江村北海」(えむらほつかい 正徳三(一七一三)年～天明八(一七八八)年)は江戸中期の儒者・漢詩人。[彼のウィキ](#)によれば、福井藩の儒者伊藤竜洲の第二子であったが、『明石藩士であり母の兄にあたる河村家で生まれ、そこで養育された。はじめ学問には無関心だ

ったが、北海の俳諧を見た梁田蛻巖に激励され、『勉学に専念。父の友人である丹後宮津藩の儒者・江村毅庵の養子となる。藩主・青山幸道は北海に吏才があることに気づき』、『次第に重用』された。宝暦八（一七五八）年、『美濃郡上藩に移封の際、病を理由に辞任を願ったが許されず』、『郡上に同行』している。宝暦十三年には『許されて京都に帰ったが、その後も時々郡上に行』って『教授し、または藩の諮問に応じた』。安永四（一七七五）年、『幸道が隠居したのを機会に致仕し、京都の室町に対梢館を建て隠居』した。

「実際に迂なる」現実の事実に疎いこと。

「段氏の記述に怪異の事多きも、是れ却つて、當時唐土に行はれたる迷信、錯誤の實況を直筆せる者なれば、其頃支那に於る一汎人智の程度を察するに最も便利有る」私は「西陽雜俎」の愛読者であり、博物学的民俗学的観点から熊楠に完全に同感である。

「ゲスネル」スイスの博物学者で書誌学者コンラート・ゲスナー（Conrad Gesner 一五一六年～一五六五年）。医学・神学を始めたとしてあらゆる分野に互つて博覧強記で、古典語を含めた多言語に通じ、それを活用して業績をあげた碩学。著書「動物誌」全五巻（一五五一年～一五五八年）は、近代動物学の先駆けとされ、植物学にも長じた。また、書誌学の基礎を築いたとされる「世界書誌」（一五四五年～一五五五年）を著わし、「書誌学の父」とも呼ばれる。[当該ウィキ](#)によれば、『世界的な博物学者である南方熊楠はゲスナーに感銘を受け』『北米時代の日記に「吾れ欲くは「やぶちゃん注」：「ねがはくは」。」日本のゲスネルとならん」と記している』とあるのは、熊楠ファンの間では有名なエピソードである。

「アルドロヴンズ」イタリアの博物学者ウリッセ・アルドロヴァンディ（Ulisse Aldrovandi 一五二二年～一六〇五年）はである。「Aldrovandus」という名を用いることもある。『ボローニャ大学で医学と哲学を教授した。研究対象は多岐に渡り、昆虫・動物・植物・科学一般などあらゆる分野に精通した。ゲスナーの「動物誌」を参考にした「怪物誌」(Monstrorum historia)はそのモンスターム・ワールドの強烈な一冊である。

「航魚」^{タコウネ}頭足綱八腕形上目タコ目アオイガイ上科アオイガイ科アオイガイ属タコブネ *Argonauta hians* の美しい貝殻様の卵保護の殻を成形する♀♂（♂は作らない）の異名。私はビーチ・コーミングで採取した三個を持っている。但し、同種は太平洋及び日本海の暖海域に分布するので、ここでは、西洋の古博物書を含むので、他に似た殻をやはり♀♂のみが持ち、分布も広汎（全世界の熱帯・暖海域。太平洋・インド洋・大西洋・地中海）の表層に棲息するアオイガイ属アオイガイ *Argonauta argo* も挙げておく必要がある。但し、以下のこれを

「見れば凶事有り」という伝承は私は寡聞にして知らない。原拠が何か、非常に興味があると

ころだ。なお、私の「大和本草卷之十四 水蟲 介類 タコブ子」(ブログ版)や、サイト版の「栗氏千蟲譜 卷十(全) 栗本丹洲」の最後のそれ(画像多数。まず、失望させない

と自負する)や、「[和漢三才圖會卷第四十七](#) [介貝部](#)【蚌類 蛤類 螺類】」の「貝鮓(かひたこ たこふね)」もよろしければ、読みたい。

「[印魚](#)」条コバンフネ 条鰭綱スズキ目コバンザメ科コバンザメ属 *Echeneis* のコバンザメ類のことであるが、「フネ」は不審。前の「タコフネ」に引かれて熊楠が誤った可能性が高い気がする。或いは紀州で「サメ」を「フネ」と呼ぶのだろうか? (形が舟に似てはいるけれど) 私の「栗

[本丹洲 魚譜 白のコバンザメ](#)」を参照されたい。以下、「印魚」は訴訟事件を長引かし」については、荒俣宏氏の「世界大博物図鑑 2 魚類」(一九九四年平凡社刊)の「コバンザメ」の項の「博物誌」の最後に(ピリオド・コンマを句読点に代えた)、『この魚をもつていと、裁判に勝つことができるという俗信がある。これは裁判を長びかせれば、結局勝つことができるという考えによるらしい(谷津直秀『動物分類表』)(引用書は一九一四年刊)とある。これは、少し意味が判りにくい、要はコバンザメのその吸着力を以って裁判相手から決して離れないで訴訟闘争を続けることで勝つという覚悟の意味が元であろうと私は解釈している(他意味があるとなれば、是非、お教え戴きたい)。私の「[生物學講話](#) [丘淺次郎](#) [四 寄生と共棲](#) [五 共棲](#)」(3)も参照されたい。

「印度の象は毎度龍と闘て相討ちて果る」これも原拠が判らない。但し、インドでは蛇或いは大蛇が象の天敵とされてはいる。大蛇は中国では龍ナイガとは成ったが、これも原拠が知りたいところ。

「段氏が智識を求る用意極て周到なりしは、卷十八に、諸外國の植物を載せたるに」「西陽雜俎」の「卷十八」は「廣動植物之三」。

「紫鯽の眞臘名勒佉(ラック)」「紫鯽」は「しりう(しりゅう)」と読んでおく。同字の音はネットで調べると、一応、呉音が「ル」で、漢音が「リュウ(歴史的仮名遣・リウ)」である。納得のゆく読みだが、しかし、所持する「東洋文庫」(一九九四年刊)の今井与志雄氏の訳注の中では「鯽」に『こう』とルビされておられ、また、[サイト](#)「[和漢薬・生薬の読み方](#)」のこちらでは『紫鯽(しきょう)』である。しかし現代の拼音では「li」で、これは「リ(オ)ウ」であるからして、私は最初の読みでゆく。さても「紫鯽」とは、マメ目マメ科マメ亜科インゲン連ブテア属ハナモツヤクノキ *Butea monosperma* (紫鯽樹・紫柳)或いは同じく紫鯽樹・馬鹿花と漢字表記する同属の別種 *Butea suberecta* を指す(これは植物では最も信頼のおける[サイト](#)「[跡見群芳譜](#)」のこちらに拠った)。ブテア属はインドから東南アジアにかけて広く分布する。最初に示したハナモツヤクノキは、[当該属のウィキ](#)によれば、『ラックカイガラムシの宿主としてしられる。ラックカイガラムシの分泌する樹脂を採取して、花没薬(はなもつやく)という生薬や染色の臘脂に用いられる』とある。虫体被覆物質と虫体内色素の両方を利用する Lac に代表されるラックカイガラムシ科 *Kerriidae* につ

の私の注を参照して戴きたい。今村氏の「西陽雜俎」の訳によれば、カンボジア（原本では「眞臘國」）に産出し、現地では『ローキア勒佉と呼んでいる』。『子を結ばない』が、『濃霧、露および雨が樹の枝々にかかってぬらすと、その樹から、すぐ紫』鉶（原本自体で段成式が字を誤っている）『が出る』とある。まさにラックカイガラムシの体を覆う樹脂状の物質で、精製して塗料・接着剤などに現在も普通に用いられているところの「ラック」のことである。

「波斯棗のペルシア名窟莽（クルマ）」私は本文内で「ペルシアなつめ」と当て読みしたが、今村氏は「ペルシア『そう』と読んでおられ、「窟莽」には「くつもう」とルビされる。訳によれば、『形は、バナナに似てい』て、『花に二つの甲があり、徐々に開花する。裂け目に十余、種子の房があ』って、『核が熟するとき、朱氏は黒である。形は乾した棗なつめに似ている。味は甘く、『食用になる』とあって、今井氏はこの「窟莽」について、『ナツメヤシ』のペルシア名という』と注されておられる。ヤシ目ヤシ科ナツメヤシ属ナツメヤシ *Phoenix dactylifera* である。実はデーツ (Date) と呼ばれ、北アフリカや中東では現在も主要な食品の一つである。

「扁桃の波斯名婆淡（バダム）」「扁桃」はバラ目バラ科モモ亜科サクラ属ヘントウ *Amygdalus dulcis* で、ご存知、種子の殻を取り除いた仁の部分が生の「アーモンド」である。

「無花果のペルシア名阿駟（アンジル）」底本は「駟」の（つくり）が「且」ではなく「貝」であるが、[中文ウィキの「無花果」](#)によって特異的に訂した。バラ目クワ科イチジク属イチジク *Ficus carica*。同ウィキにはペルシャ語のラテン文字表記で「anjir」と確かに出る。「西陽雜俎」では第十八巻の最後に「阿驛」として登場する。

*

阿驛、波斯國呼爲阿駟拂林呼爲底珍。樹長丈四五、枝葉繁茂。葉有五出、似棹卑麻。無花而實、實赤色、類棹卑子、味似甘柿、一月一熟。

*

但し、今村氏の注で、「阿驛」については、『案ずるに、『本草綱目』三一「果」部「夷果類」の「無花果」』に『引』かれる『「阿駟」』と字注され、訳注では、その漢字表記について『新ペルシア語で、無花果を示す語は、anjir であるが、中国語の転写は、それとは無関係で、ペルシア語のより古い段階、中世ペルシア語とかかわりがあるらしい』と解説しておられる（今村氏の解説はもっと詳しい（もっと複雑である）ので、より詳しくは必ず引用書を参照されたい）。その「拂林」（アラビア）「名」が「底珍」「ティン」であるという点についても、今村は詳しい注を附しておられ、『アラビア語』では『tin, tine, rina』とある。

「De Candolle, `Origin of Cultivated Plants,` 1890, passim.」フランス系のスイスの植物学者ア

ルフォンス・ルイス・ピエール・ピラム・ドウ・カンドール (Alphonse Louis Pierre Pyrame de Candolle 一八〇六年～一八九三年)。「国際藻類・菌類・植物命名規約」(ICBN)の制定に功績があった。この原本は一八八二年に刊行されたフランス語で書かれた「*Origine des plantes cultivées*」(「栽培植物の起原」)である。

「エゴノキ」ツツジ目エゴノキ科エゴノキ属エゴノキ *Syrax japonica*。本邦で全国の雑木林に多く見られる落葉小高木であるが、果皮に有毒なエゴサポニンを多く含むことはあまり知られていないと思われない。それから果汁を絞ったりしたら、飲むどころか、触っただけでも炎症を起こすぞ(溶血作用もあるという)！[当該ウィキ](#)によれば、「齊墩果」が漢名とされる場合があるが、これは本来はオリーブの漢名であり、『現代中国語では「野茉莉」と呼ぶ』とある。

「齊墩果」(さいとんくわ)「如き、其記載の正確なるが上え、雑俎に波斯名齊墩、拂林名齊虛「やぶちゃん注」：「虚」は「選集」では「虚」に「尸」を懸けた字。ここで「※」としておく。」と挙げたる「これは、やはり、第十八にある、

*

齊墩樹、出波斯國。亦出拂林國、拂林呼爲齊※【音「湯」兮「反」。樹長二三丈、皮青白、花似柚、極芳香。子似楊桃、五月熟。西域人壓爲油以煮餅果、如中國之用巨勝也。

*

である。この記載を見ても判る通り、これは明らかに、シソ目モクセイ科オリーブ属オリーブ *Olea europaea* である。

「ペルシア語 *seium* ヘブリウ語」(ヘブライ語に同じ)「*sail*」今村氏の「齊墩樹」の注に「齊墩」は「オリーブ」で、『ペルシア語の *zeium* の転写である』とされた後、熊楠が以下で挙げる、論文を引かれて詳述されておられる。その今村氏の熊楠の以下の論文の引用部を恣意的に正字化して以下に示しておく。

*

其邊「やぶちゃん注」：今村氏によって『東羅馬帝国の亜細亜領』とある。」の諸氏がオリーブを呼ぶ名に、齊墩に合ひ又は近き者多し。ヘブリウの *Sail* 又は *Zeif*、波斯の *Seium*、アラビアの *Zaiun*、土耳其人「やぶちゃん注」：「トルコじん」。及びクリメヤ脱脱「やぶちゃん注」：意味不明。クリミア半島に勢力を持った元のチンギス・カンの長男ジョチの後裔が支配して興亡した遊牧政權の言語、或いはタタール語ということか？」*Seium*、アラビアの *Jit*、ヒンスクニ「やぶちゃん注」：ヒンズークスのことだろう。」の *Zeium* 等なり……「やぶちゃん注」：これは今村氏の中略であることを、[サイト「私設万葉文庫」のこちら](#)(ここで当該論文は一応(表示文字に不全があるが)読める)で確認した。」因みに言ふ。古アラビヤ

人はジェルサレムをオリヴに因んで齊墩邑 Aituni-yah と呼び、又、七八世紀の頃より、支那の泉州をも齊墩と呼り、當時の唐人が泉州府を楚桐城 Tseu-tung-ching と綽名せしをオリヴのアラビヤ名と混じての事也

*

『明治四十年』（一九〇七年）『十二月、東洋學藝雜誌、拙文「オリヴ」樹の漢名』こう表記しているが、国立国会図書館の書誌データの「目次」（本文画像は閲覧出来ない）で御注意あれ）を見る限りでは、「オリヴ樹の漢名」である。

「其卷十九」「酉陽雜俎」のそれは「廣動植之四」で「草類」が続く。

「梁の延香園の異園」梁の第二代皇帝簡文帝蕭綱（五〇三年～五五一年…武帝蕭衍の三男。土囊を身体の上に積まれて圧殺された）の作った庭園名らしい。以下は、著者段成式の自分の屋敷の竹林を手入れしていたところ、不思議な菌が生えてきたことを記した後に（「中國哲學書電子化計劃」の影印本を視認した）、

*

又、梁簡文延香園、大同十年、竹林吐二芝、長八寸、頭蓋似雞頭實、黑色。其柄似藕柄、内通幹空【一日柄幹通空】、皮質皆純白、根下微紅。雞頭實處似竹節、脫之又得脫也。自節處別生一重、如結網羅、四面同【一日周】、可五六寸、圍繞周匝、以罩柄上、相遠不相著也。其似結網衆目、輕巧可愛、其柄又得脫也。驗仙書、與威喜芝相類。

*

と出るのを指す。今村氏の訳文を参考に訓読してみる。

*

又、梁の簡文が延香園にて、大同十年「やぶちゃん注…五四四年。」、竹林、一つの芝を吐だす。長八寸、頭の蓋は雞頭の實に似て、黑色たり。其の柄、藕「やぶちゃん注…蓮根。」の柄に似、内は幹に通じ、空たり【一つに曰はく、「柄幹は通空たり。」。皮質、皆、純白にして、根の下、微かに紅し。雞頭の實のやうなる處は、竹の節に似て、之れを脱がせば、又、脱がすを得るなり「やぶちゃん注…同じようなものを剥さなくてはならない。」。節の處より、別に一重のもの生ぜしに、網羅を結べるがごときにて、四面、同じくして【一つに曰はく、「周り。」、五、六寸ばかり、圓く繞して周匝し「やぶちゃん注…丸く纏わってぐるりと取り囲み。」、以つて柄の上を罩ひて、相ひ遠れて相ひ著かざるなり。其れ、結べる網の衆の目に似て、軽く巧なること、愛すべく、其れ、柄と又に脱がし得たりしなり。仙書を驗するに、「威喜芝」と相ひ類せり。

*

「仙書」は道教の仙術書。その代表作は以下にも語られる晋代の葛洪（二八三年～三四三年）

の著「抱朴子^{ほうぼくし}」である。「威喜芝」については、今村氏が、『案ずるに、『抱朴子』内篇一一「仙薬」でいう木威喜芝であろう。同書によると、「そもそも木芝とは、松柏^{はく}の脂がしずんで地に入り、千年たつと茯苓^{ふくりよう}にかわる。茯苓が一万年たつと、その上に小さな木が生ずる。形は蓮^{はす}の花に似ている。名づけて木威喜芝という。夜、みると、光がある。持つと、たいへん滑らかである。焼いてももえない。これを身に帯びると武器をよける。雞につけて、他の雞を十二羽まぜ、一緒に籠にいれて、十二歩離れたところから箭^やを十二本射ると、他の雞はみな傷つくが、威喜芝をつけたのは、ついに傷つかないのである」。それであろう」とある。文中で「木」を外して「威喜芝」と言っているのは所持する原本でも確認した。これは恐らく、「靈芝」(レイシ *Ganoderma lucidum*) に代表される菌界担子菌門真正担子菌綱タマチヨレイタケ目マンネンタケ科マンネンタケ属 *Ganoderma* の茸類の仲間であろうとは推定される。なお、「[森林微生物管理研究グループ](#)」[サイト内の「キノガサタケとスツポンタケ」](#)にここを簡略記載した記事が載る(脱字を補った)。

*

特異な形のため記録に残っている。唐代の随筆集である酉陽雜俎には、「梁の簡文帝の延香園では、大同十年(五四四年)、竹林からきのこが出た。長さは八寸、頭の傘は鶏頭に似て黒く、その柄は中空であった。皮質はみなとても白く、根の下は、わずかに紅色だった。鶏頭の実のところは竹の節に似ている。節のところから、別に一重に網のような物が生えていた。四面は周囲が五、六寸ばかり、円形にぐりとりまき、柄の上にかぶさって、互いに付着していない。それは網の目を結ぶのに似ていて、軽く巧妙なことは愛らしく、柄とともにはずすことができた。」とあり、割合正確な描写をしている。著者の段成式は、竹林の手入れをして、病気で枯れた竹を伐ったところ、三年後(八三八年)の秋に枯根からキノガサタケが発生した。高さは一尺余で、昼頃には黒ずんでしおれてしまったという。

*

これは間違いなく、菌界担子菌門菌蕈亜門真正担子菌綱スツポンタケ目スツポンタケ科キノガサタケ属キノガサタケ *Phallus indusiatus* である。私は偶然、京都嵐山の竹林を散歩している最中に実見した。まことに妖艶で美しいものであった。しかし、当初、――「熊楠に似てどうしたものか? 彼は『コムソウダケ』の或種』と言っているが?」と甚だ腑に落ちなかったのだが? 菌蕈綱ハラタケ目フウセンタケ科フウセンタケ属シヨウゲンジ *Cortinarius caperatus* とこの茸の異名として「コムソウ(ダケ)」が一般に知られていたからである。――しかし、以下の「[The Earliest Mention of Dictyophora](#), Nature, vol. 1, 1894」(題は「[ディクティオフォラ属に関する最古の言及](#)」)については、幸いにして「[Internet archive](#)」の[こちらで原文を読むことが出来](#)(左ページ右段の中央)、さらに私は邦訳された

「南方熊楠英文論考「ネイチャー」誌篇」（二〇〇五年集英社刊）を持っていることから、苦勞せずに熊楠の記している内容を理解出来た。しかも、そこでは、まさにこの「酉陽雜俎」を英訳して、これは「コムソウダケ」世界最古の記録ではないか？ と述べているのである。而してやおら、**「Dictyophora」を調べると、キヌガサタケのシノニムに Dictyophora indusiata があつたのであつた。**

「仙書に、上帝肉芝を某仙に賜ふと有る」出典不詳。「抱朴子」に無論「肉芝」は出るが、こうした内容は記されていない。

「Fistulina hepatica」真正担子菌綱ハラタケ目カンゾウタケ（肝臓茸）科カンゾウタケ属カンゾウタケ *Fistulina hepatica* である。[当該ウィキ](#)によれば、『全世界に広く分布し、欧米では広く食用にされている。アメリカなどでは「Beefsteak Fungus」・「貧者のビーフステーキ」、フランスでは「牛の舌」（Langue de boeuf）と呼ばれている』。『梅雨期と秋に、スダジイ、マテバシイなど（欧米ではオークや栗の木、オーストラリアではユーカリ）の根元に生え、褐色腐朽を引き起こす。傘は舌状から扇型で、表面は微細な粒状で色は赤く、肝臓のように見える。裏はスポンジ状の管孔が密生し、この内面に胞子を形成する。他のヒダナシタケ類と異なり、この管孔はチューブ状に一本ずつ分離している』。『カンゾウタケ科に属するキノコは、世界中で数種類しかない小規模なグループを形成している。現在、カンゾウタケ属は本種を含む』八『種が命名されている』。本種は『近年の分子系統解析において、同科の『ヌルデタケ』属 *Porodiscus* 『やスエヒロタケ科』Schizophyllaceae』の菌類と近縁であることが示されている』。『肉は、霜降り肉のような独特の色合いを呈しているうえ赤い液汁を含み、英名の Beefsteak Fungus の名の通りである。生ではわずかに酸味があるが、管孔を取った上で、生のまま、またはゆでて刺身や味噌汁にしたり、炒めて食べたりする』とある。

「ヴェジタブルビーフステーキ」Vegetable beefsteak。英文ウィキの「Fistulina hepatica」には「beefsteak fungus, also known as beefsteak polypore, ox tongue, or tongue mushroom」の異名が並び、[英文サイトのこちらには](#)、**「The Vegetable Beefsteak. The Beefsteak Mushroom. Fistulina Hepatica」** がしっかりあった（太字は私が附した）。

「昆明池水網藻の記」「酉陽雜俎」の巻十九には、「昆明池」二箇所出て、水草と水藻が語られてある。二つ並べて示す。「中國哲學書電子化計劃」の影印本を視認した（前者が[ここ](#)、後者が[ここ](#)）。ここで熊楠が問題にしているのは後者であるが、私はヒシが大好きなので、敢えて挙げた。

*

菱、一名水栗。一名解唇。漢武昆明池中有浮根菱、根出水上、葉淪沒波下、亦曰青水菱。玄都有菱碧色、狀如雞飛、名翻雞菱、仙人鳧伯子常採之。

*

芰^し、一名、水栗^{すいりつ}。一名、薺^{かいこう}。漢の武が昆明池中に浮根菱^{ふこんりやう}有り。根、水上に出で、葉、波下に淪没す。亦、「青水芰」と曰ふ。玄都に菱の碧色なる有り、狀^{かたち}、雞の飛ぶがごとし。名づけて「翻雞芰」、仙人鳧^ふ伯子^{はくし}、常に之れを採れり。

*

水網藻、漢武昆明池中有水網藻、枝横側水上、長八九尺、有似網目。鳧鴨^{ふがも}入此草中、皆不得出、因名之。

*

水網藻^{すいもうさうぞう}。漢の武が昆明池中に水網藻有り、枝、水上に横側^{わうそく}し「やぶちゃん注」水面に突き出して水面上に広く広がっていて。」、長さ、八、九尺「やぶちゃん注」唐代の一尺は三十一・一センチメートルであるから、約二・四九〜二・八〇メートル。』にして、網の目に似たる有り。鳧鴨^{ふがも}、此の草中に入れば、皆、出づるを得ずと。因りて之之れに名づく。

*

「アミミドロ」(英語 waler Net) 網深泥。緑藻植物門緑藻綱ヨコワミドロ目アミミドロ科アミミドロ属 *Hydrodictyon*。種は当該ウィキによれば、*Hydrodictyon africanum*・*Hydrodictyon indicum*・*Hydrodictyon patenaeforme*・*Hydrodictyon reticulatum* の四種を挙げるものの、本文内では『種の同定にはやや疑問があるようである』と記す。以下、同ウィキから引用する。『淡水性の藻類で、網の目のような形をしている。』『大きいものは全体で』三〇センチメートル『にもなり、淡水藻では大型の部類に属する。全体は細長い袋状で、五角形か六角形の網目構造からなっている。つまり、金網を円筒形の袋の形につなげたような形である。その長さは』一センチメートル『足らずのものから前述のように大きなものまで様々である。ただし大きいものは全体の形が壊れてしまっている場合も多い。固着のための構造はなく、浅い水域で浮遊するか、何かに引っ掛かって固まっているだけである。色は鮮やかな黄緑。』『網目の各々の辺が』一『個の細胞からなっている。個々の細胞は円柱形。それぞれが当初は単核であるが、成長に伴って次第に多核になる。』『その姿に特にまとまりが感じられないこと、あまりに大きいことから、この藻類はアオミドロなどと同じように簡単ながらも』、『多細胞藻類であるように見えるが、実は違っている。アオミドロなど多細胞藻類は細胞分裂によって細胞を増やしながら、全体が成長して行くのであるが、アミミドロの場合、小さい藻体も大きい藻体も細胞数は変わらず、個々の細胞の大きさが異なるだけである。成長は、細胞それぞれが大きくなるだけであり、したがって、小さい藻体では網の目も細かく、大きい藻体では網の目は粗い。』『つまり、この藻類は非常に大柄ながら、クンシヨウモ』(アミミドロ科クンシヨウモ属 *Pedistrum*)『やボルボックス』(緑藻綱ボルボックス目ボルボックス科

ボルボックス属 *Tohar*)』と同様に、細胞群体である。群体全体の細胞数は一定で、細胞数が増えるのではなく、細胞が育つことだけで成長する。ただし、大くなる間に破れるようにして藻体の形がくずれることがある。網が破れても細胞の壊れていない部分は生きているから、群体全体の形を止めない場合もままある』。『なお、細胞群体のことを別名を定数群体と言う。これは、群体を構成する細胞の数が一定(たいていは2の階乗、群体ができる時の細胞分裂回数による) ためであるが、アミミドロの場合、細胞数は約2万個で必ずしも一定しない』。『主として無性生殖で増える。暖かい時期には、大きく成長した群体において、細胞内がすべて鞭毛を持つ遊走子に分かれる。遊走子は泳ぎ回る余裕がないぐらい密生し、細胞内側の表面に並ぶ。やがてそれらが群体を構成する細胞に変わり、網目を形成する。やがて細胞壁が壊れると、新しい群体が放出される。つまり、親群体の個々の細胞から、それぞれ新しい群体が作られる。群体が円筒形をしているのは、もとの細胞の形を反映したものである』。『有性生殖は細胞内に多数の配偶子が形成され、それが泳ぎ出して接合することで行われる。配偶子は先端に』二『本の等長の鞭毛を持つ、同型配偶子である。接合子は発芽するとポリエドラ』(polyedra : 藻類の生活環上の特定形態期の名)『となり、その内部に多数の遊走子を形成し、それが網状の群体を作る。接合核は発芽時に減数分裂を行う』。『ごく浅い、富栄養な水域に生育する。水田にもよく見られる。その他、河川の下よみのごく浅いところなどにも出現する』。『特に役に立つ場面はない。迷惑することもほとんどない。まれに増えて過ぎて水路の邪魔になったり、金魚などの養魚場で増えて、小魚が藻体の網の目に引っ掛かって死ぬ、などという話がある程度である』。『アミミドロは細胞群体を形成することや、その繁殖法がクンシヨウモと同じで、これらは同じ群に属する』。『従来はクロロコックム目』Chlorococcales』とすることが多かったが、現在では、遺伝子解析などからヨコワミドロ目』Sphaeropleales』に分類されることが分かっている』とある。

「The Earliest Mention of Hydrodictyon, Nature, vol. lxx, 1904」 標題は「アミミドロ属に関する最古の言及」。[「Internet archive」のこちらで原文が読める](#)(左ページの左下段から)。見ると、先の「ネイチャー」への投稿と同じく、「西陽雜俎」の「水網藻」のの英訳を示して、現在のアミミドロの生態を誇張して描写したものと思われる(但し、「長八九尺」という寸法は巨大に過ぎると退けている)、これはアミミドロに関する最古の記述であろうと記している。

「松下見林」(まつしたけんりん 寛永一四(一六三七)年〜元禄一六(一七〇四)年)江戸前期の医師で儒者・国学者。本姓は橘、名は秀明・慶撰。大坂の医師松下見朴の養子。儒医古林見宜(けんぎ)に学び、京で医業の傍ら、「三代実録」を校訂し、ここに出る「異称日本伝」の外、「公事根源集釈」「習医規格」などを著わしている。後年、讃岐高松藩主松平

頼常に仕えた。

「異稱日本傳」外交史書。全三卷。元禄元（一六八八）年に書き上げ、同七年に板行された。中国や朝鮮の歴史書から、日本関係の記事を抜粋し、これに見林が考証と批評を加えたもの。外交関係史としては日本初の試みである。国立国会図書館デジタルコレクションの「史籍集覽」の二が当該部。「西陽雜俎」の卷三「貝編」（仏教經典のこと。貝多羅樹（現在ではインドのそれは单子葉植物綱ヤシ目ヤシ科パルミラヤシ属オウギヤシ *Borassus flabellifer* に同定されている）の葉に經典を書写したものの意である）訓読を試みる。

*

國「やぶちゃん注…唐。」の初め、僧玄奘、五印「やぶちゃん注…天竺を東西南北と中に分けた五天竺全部でインドのこと。」に往きて經を取めたり。西域、之れを敬す。成式「やぶちゃん注…著者の自称。」倭國の僧金剛三昧「やぶちゃん注…熊楠が述べる如く、現在も、この名の日本人僧が誰だったのか、全く判っていない。」に見ゆるに、言はく、「嘗て中天「やぶちゃん注…上記の中天竺。中部インド。」に至りしに、寺中、多く、玄奘が麻の屨及び匙「やぶちゃん注…「異稱日本伝」では「カイ」とルビ。」・筋「やぶちゃん注…音は「チヨ（チヨ）。箸。」、綵雲を以つて之れを乗せて畫けり。蓋し、西域には無き所の者なればなり。齋日の至る毎に、輒ち、膜拜す。」と。

*

最後の「膜拜」は「跪いて両手を挙げて礼をすること」を指す。仏教に於ける最高無条件の礼式である。

「眞如親王」瀝澤龍彦最後の名作で知られる高岳親王（延暦一八（七九九）年～？（貞観七（八六五）年とも元慶五（八八一）年ともされるが不明）、平城天皇の第三皇子。嵯峨天皇の皇太子に立てられたが、「葉子の変に」より廃された。後に復権して四品となるが、出家し、僧侶となったその法名が「眞如」であり、空海（宝亀五（七七四）年～承和二（八三五）年）の十大弟子の一人となり、仏法を求めて六十四という老齢で入唐を決意、貞観六（八六四）年に長安に到着して在唐三十余年になる留学僧円載の手配により、西明寺に迎えられた。しかし、当時の唐は武宗の仏教弾圧政策（会昌の廃仏）の影響により、仏教は衰退の極みにあったことから、親王は長安で優れた師を得ることが出来なかった。そこで、遂に天竺行を決意し、貞観七（八六五）年、皇帝の勅許を得て、従者三名とともに、広州より海路、天竺を目指して出発したが、その後、消息を絶った。なお、在原業平は甥に当たる。

「羅越」羅越国はマレー半島の南端にあったと推定されている国。ここで元慶五年に亡くなったというのは、「日本三代実録」の元慶五年十月十三日の条にある、当時、在唐していた留学僧中ちゅうかん權らの報告によるものである（前の注とここは概ね当該人物のウィキに拠った）。

「師鍊」鎌倉後期から南北朝時代にかけての臨濟僧で五山文学の代表者の一人である虎関師鍊（弘安元（一二七八）年〜興国七／貞和二（一二四六）年）のこと。彼は晩年、京の東福寺海蔵院に退き、「海蔵和尚」とも呼ばれ、元亨二（一二三二）年に白河済北庵で優れた仏教史の史書「元亨釈書」を著したが、そのこちら（[国立国会図書館デジタルコレクションの永祿元（一二五八）年の写本の当該箇所画像](#)。左頁の後ろから三行目以下）に、この叙述が出る。

「自推古、至今七百歳、學者之事西遊也以千百數、而跂印度者、只如一人而已。蓋不考金剛三昧事也」「推古より今に至るまで七百歳。學者の西遊を事とするや、千百を以つて數ふ。而れども、印度につまたちてむか跂ふ者は、只、一人のみのごとし」と、けだし、金剛三昧のことを考えざりしなり」

「The Discovery of Japan,`Nature, vol. lxvii, p. 611, 1903」「日本の発見」。[「Internet archive」のこちら](#)で原本が読め、その第二段落後半に以上の「西陽雜俎」の内容が短く記されてある。」

「やぶちゃん注：以下の段落は前の「7」の補足で、底本では全体が一字下げとなっている。」

吾邦の高僧、海外に名を馳せ乍ら、本國に知られざる例少なからず、之例「やぶちゃん注：「たとへば」、慈覺大師入唐求法巡禮行記に見えたる、日本國靈仙三藏如き、中々の學僧にて、淳和帝より學資を賜はりしが、支那にて毒殺され、異國の緇徒「やぶちゃん注：「し」と。僧衆の意。」その跡を弔ひしのみ、其詳傳は傳らず、茅亭客話（五代詩話卷八に引）に、瓦屋和尚、名能光、日本國人也、嗣洞山悟本禪師、天復年初入蜀、僞永泰軍節度使鹿虔扈、捨碧雞坊宅、爲禪院居之、至孟蜀長興年末遷化、時齒一百六十三、此僧德望高かりしのみならず、海外で二百歳近く迄長生とは、偏えに日本の面目也、廻か「やぶちゃん注：「はるか」。』降て十七世紀の初めに伊太利の旅行家「ピエトロ、デラ、グレ」が波斯國イスパハンで逢し日本の碩學、「ピエトロ、バオリノ、キベ」（木部か）如き、自在に拉丁語「やぶちゃん注：「ラテン語」」を使い、道を求めてローマに留學したりと（「*Viaggi di Pietro della Valle,`Brighton, 1843, vol. i, p. 492*」、

「やぶちゃん注：「慈覺大師入唐求法巡禮行記」につたうぐほふじゅんれいかうき（につとうぐほうじゅんれいかうき）」と読む（「法」は通常の歴史的仮名遣「はふ」であるが、仏教用語に限っては「ほふ」と読むのを通例としている）。最後に実施された遣唐使（承和五（八三八）年出發、翌年到着。この後、寛平六（八九四）年に、かの菅原道真を大使とし、絵巻で知られる紀長谷雄を副使とする遣唐使が立案されたが、唐国内の混乱や日本文化の發達を理由とした道真の建議によって停止となった。その後、大使の任は解かれなかったが（但

し、道真は失脚し、延喜三年二月二十五日（九〇三年三月二十六日）に失意のうちに大宰府で没した）、その十三年後の九〇七年に唐が滅亡したため、遣唐使はそこで名実ともに廃止となった）**における入唐請益僧**（「更に教えを請う」の意で、本邦で既にそれぞれの学業を規定通りに身につけたとされる僧が、その業を深め、疑問を解決するために短期に留学する場合に用いられた呼称）であった**慈覚大師円仁**（延暦一三（七九四）年～貞観六（八六四）年…下野国生まれ。出自は壬生氏。最澄に師事した天台僧で、後に「山門派」の祖となった。

仁寿四（八五四）年六十一歳で第三代天台座主となった）の**出発（当時、四十五歳）から帰国に至る九年六ヶ月に亙る日記**。これより前の承和三年・四年と二回の渡航に失敗した後、承和五年六月十三日に博多津を出港した日から記し始め、博多津に到着して鴻臚館に入り（承和十四（八四七）年九月十九日の条）、朝廷から円仁を無事連れ帰ってきた新羅商人たちへの十分な報酬を命じた太政官符が発せられた同年十二月十四日で日記は終わっている。その間の波乱万丈の一部始終は**彼のウイキ**を参照されたい。[国立国会図書館デジタルコレクションのこちら](#)で大正一五（一九二六）年東洋文庫刊の写本本文（影印）全四冊と活字本の解説一冊が視認出来る。

「日本國靈仙三藏」平安前期の法相宗の僧**靈仙**（天平宝字三（七五九）年？～天長四（八二七）年？）。日本で唯一の三藏法師（「三藏法師」とは名前ではなく、仏教の経藏・律藏・論藏の三藏に精通した僧侶を指す一般名詞で、後には転じて「訳経僧」を指すようになった）。**当該ウイキ**によれば、『出自については不明であるが、近江国（現・滋賀県）の出身とも阿波国（現・徳島県）出身とも伝えられる。「靈船」「靈宣」「靈仙三藏」とも称される』。『興福寺で学んだ後』、延暦二三（八〇四）年に第十八次『遣唐使の一人として入唐した』。『同期に最澄・空海・橘逸勢らがいる。長安で学び』、八一〇年には『醴泉寺（れいせんじ）にて、カシミールから来た般若三藏が請来した「大乘本生心地観経」を翻訳する際の筆受』（経典を漢訳する際に梵語の口述を漢文で筆記する係の者）や『訳語（をさ）』（漢語・漢字に置き換える係。現代の翻訳に相当する）『を務めた』。八一年に『「三藏法師」の号を与えられ』た。『時の唐の皇帝・憲宗は仏教の熱心な保護者であり、靈仙も寵愛を受けて、大元帥法の秘法を受ける便宜を与えられるが、仏教の秘伝が国内から失われることを恐れた憲宗によって、日本への帰国を禁じられた。憲宗が反仏教徒に暗殺されると、迫害を恐れて五台山に移』った。八二五年には『淳和天皇』（じゅんなてんのう…在位…弘仁一四（八二三）年～天長一〇（八三三）年。桓武天皇第七皇子）『から渤海の僧・貞素に託された黄金を受け取り、その返礼として仏舍利や経典を貞素に託して日本に届けさせた。日本側は貞素の労苦を労うとともに靈仙への追加の黄金の送付を依頼し、また日本に残された靈仙の弟妹に、阿波国の稲千束を支給するよう計らった。その後』、八二八年（中唐末期。本邦は天長五年）

までの『間に没したようで、一説によれば』、『靈境寺の浴室院で毒殺されたという。唐に渡ってから』、『死ぬまで』、『日本の地を踏むことはなかった』。八四〇年に『靈境寺に立ち寄った円仁が、入唐留学僧・靈仙の最期の様子を聞いている。また』、『承和五（八三八）年に『円行・常暁が入唐した際には、靈仙の門人であった僧侶から手厚く遇されて、靈仙の遺物や大元帥法の秘伝などを授けられて日本に持ち帰ったという』とある。

「緇徒」「緇」は黒い色で墨染めの衣で「僧侶」の意となる。

「茅亭客話」（ぼうていかくわ…現代仮名遣）宋の黄休復の撰になる、五代から宋の初め頃にかけての四川の出来事を記したもの。全十卷。私の「怪奇談集」に「老嫗茶話 茅亭客話

（虎の災難）」がある。その三卷（「漢籍リポジトリ」の完全電子データ）の「勾居士」に、

*

勾居士名令玄蜀都人也宗嗣張平雲有學人問答隨機應響著火蓮集無相寶山論法印傳況道雜言百餘篇有敬禮瓦屋和尚塔偈曰大空無盡劫成塵玄步孤高物外人日本國來尋彼岸洞山林下過迷津流流法乳誰無分了了教知我最親一百六十三歲後方於此塔葬全身瓦屋和尚名能光日本國人也嗣洞山悟本禪師天復年初入蜀僞永泰軍節度使祿虔辰捨碧雞坊宅為禪院居之至孟蜀長興年末遷化時齒一百六十三故有是句

*

とある（リンク先では影印本も見られる）。当該部のみの訓読を試みる（字体は熊楠のそれに従った）。

*

瓦屋和尚、名は能光、日本國の人なり。洞山悟本禪師を嗣ぐ。天復の年初、蜀に入る。僞永泰軍節度使鹿虔辰、碧雞坊の宅を捨し、禪院として之に居せしむ。孟蜀の長興年末に至りて遷化す。時に齒一百六十三なり。

*

もし「能光」が正式な日本名の俗名であったなら「よしみつ」と読める。日本ではあり得ないが、中国での名乗りであるから、あり得ないとは言えない気がする。「天復」は唐の昭宗の治世に用いられた元号（九〇一年～九〇四年）。「僞永泰軍節度使鹿虔辰」唐滅亡後の五代まで及んだ官人で詩人のようである。「永泰軍節度使」は五代の旧唐の南を治めた官名であるから、その上の「僞」というのは甚だ不審であったので、調べてみると、「古今詞話七」[（影印本。「中國哲學書電子化計劃」の「鹿虔辰」を見ると、「鹿爲永泰軍節度使」とあった。何のことはない、「鹿、永泰軍節度使たり」じゃあねえか。阿呆臭！「碧雞坊」鹿虔辰の所有していた道観の僧坊か或いは彼の別邸か？「捨し」喜捨し。「孟蜀」五代十国時代に成都を中心に四川省を支配した後蜀（九三四年～九六五年）の別称国名。「長興」は五代の二番目の](#)

王朝であった後唐の明宗李嗣源^{しげん}の治世に用いられた元号。九三〇年～九三三年。

「五代詩話」清の王阮亭の原編で、鄭方坤の刪補になる一七四八年序の詩話集成。

以下、表記は本文レベルに戻る。冒頭の字下げがないのはママ。」

之を要するに、段氏決して全く虚構して西陽雜俎を著したるに非ず、又況んや上に引ける葉限の物語は、往古南支那土俗の特色を寫せる點多く、之を談りし人の姓名迄も明記したれば、其里俗古話學上の價值は、優に、近時歐米又本邦に持囃さるゝ仙姑譚、御伽草紙が、多く後人任意の文飾脚色を加え含めるに駕する者と知るべし、

「やぶちゃん注…「持囃さるゝ」「もてはやさるる」。

「仙姑譚」女性の仙人の話群。なお、中国の代表的な女仙で、「八仙」（中国では仙人は実在の人物と考えられている）の唯一の女仙に何仙姑^{かせんこ}がいる。因みにこの「八仙」が七福神の起源とする説があり、とすれば、弁天の原型ということにもなろう。

「駕する」他を凌^{しの}ぐ。

さて。以下は全体が一字下げで「附記」を除いて、本文は本篇のそれよりもポイント落ちである。しかし、これは本「西曆九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語（異れる民族間に存する類似古話の比較研究）」への附記ではなく、先に同じ『東京人類学雑誌』に載せた論考「本邦に於ける動物崇拜」（リンク先は私のPDF一括版）の追加記事である。本来なら、「南方隨筆」として纏めた際には、それをその記事の後ろに配すべきものであった。私の以上の一括版やブログ版の最後では、そのように処理しておいた。さらに、熊楠が追加した「橋南谿の西遊記卷一」の「榎木の大蛇^{だいじや}」は、私のお節介で「南方熊楠 本邦に於ける動物崇拜（18…野槌）」の注で既にして電子化してある（PDF版も同じ）ので、一切の注を必要としないのである。」

附記

人類學會雜誌二九一號に、予が載せたり野槌に似たる事、橋南谿の西遊記卷一出づ、其略に云く、肥後の五日町、求摩川「やぶちゃん注…初出では「求麻川」とする。」端の大なる榎木の空洞に、年久しく大蛇住り、時々出で現はるゝを見れば病むとて、木の下を通る者必ず低頭す、太さ二三尺、總身白く、長さ纔に三尺餘、譬へば「やぶちゃん注…初出では「譬ば」である。」犬の足無き如く、又芋蟲に似たり、土俗之を一寸坊蛇と云ふ、「やぶちゃん注…初出では「下略、」とし、下方二字上げで「完）」（これは本「西曆九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語（異れる民族間に存する類似古話の比較研究）」の論考の「完」の意）とする。」

（明治四十四年三月、人類第二六卷）

南方熊楠「西暦九世紀の支那書に載せたるシンダレラ物語
(異なる民族間に存する類似古話の比較研究)」

藪野直史 注 完